912.6
O475k
00229993

国立国会図書館

702

岡本綺堂著

綺堂戲曲集

第參卷

東京 春陽堂版

第三卷目次

西南戰爭聞書……一
お七……一五九
頼豪阿闍梨……一八七
清正の娘……二一五
戰の後……二四五
遊女物語……三〇三
京の友禪……三五五
邯鄲……三八一
寺の門前……四〇三

912.6
Q475t

229993

西南戰爭聞書

大正十一年二月作。

大正十一年三月。明治座初演。

初演當時の主なる役割——西郷隆盛（市川左團次）桐野利秋（片岡市藏）森田金八郎（市川猿之助）石村賢次郎（市村龜藏）相良治兵衞（市川左升）僕虎吉（市川荒次郎）僧西照（市川壽美藏）進藤お幾（市川市十郎）進藤勇吉（市川小太夫）星崎お弓（市川松蔦）など。

登場人物——西郷隆盛。桐野利秋。森田金八郎。石村賢次郎。相良治兵衞。永山萬次。雨倉彌太郎。武上一作。遠澤正安。飯原勝彌。鮫島新七。有馬銀之助。僧西照。西郷の僕虎吉。進藤お幾。進藤勇吉。星崎お弓。ほかに看護婦。西郷の僕。造船所の小使。車夫。私學校の生徒。薩軍の兵士。士族の母、妻、娘、町の男、女など。

第一幕

鹿兒島の舊城下、新照院町筋、甲突川のほとり。正面は川をへだて、田畑をみる。川の堤には枯柳の立木あり。明治十年二月二日（舊暦十二月二十日）の午後。

（辻待の人力車夫熊藏、五助のふたりは柳の下に車を置きて焚火をしてゐる。水の音薄くきこゆ。）

熊藏。 今年の冬は馬鹿に寒いな。

五助。 歳の暮だ。寒いのが當りまへかも知れないが、今年は些と寒さが强過ぎるやうだ。

熊藏。　どうでも近いうちに雪らしいな。空がすつかり曇つて來た。

（ふたりは焚火を取りまいてゐる。上のかたより小使喜兵衛、五十餘歳、海軍造船所と記せる提灯に火を點さずに持ちて出づ。）

喜兵衛。　寒い、寒い。おゝ、みんなもよく稼ぎに出てござるな。

熊藏。　おゝ、喜兵衛どんか。まあ、あたつて行つたらどうだ。

喜兵衛。　少しあたらせて貰ひませうかな。（焚火のそばに來る。）寒いも寒いが、世間がさうぐ〳〵しいので、歳の暮といふのに何處もかしこもひつそりしてゐる。これではよい春も來さうもないな。

五助。　まつたく世間がさうぐ〳〵しいので、こんな寂しい歳の暮はない。

熊藏。　日がくれると往來が絶えてしまふので、こつちの商賣は型無しだ。

喜兵衛。　なにしろ學校の生徒達も、もう好加減におとなしくなつて呉れなければ、どうにも斯うにも仕樣がない。あの衆の亂暴にも實に困つたものだ。

熊藏。　四五日前から草牟田の火藥局へあばれ込んで、むやみに鐵砲玉を持ち出すといふが、一體どうする料簡だらう。

喜兵衛。　それがまことに穩かでないことだ。どうする料簡か知らないが、多人數が一度におしかけて來て、宿直の人達をおどかして無理無體に彈藥を持ち出すので、陸軍の方でも持餘してゐる。火藥局だけならまだ好いが、今に造船所の方へも押掛けて來はしまいかと、わたしなどもびく〳〵してゐるのだ。

（下のかたより町のむすめ二人は買物の包みをかゝへて足早に出づ。）

娘甲。　私學校の人たちが大勢來たから、早く行かうではありませんか。

娘乙。　女に亂暴はしないと云ひますけれど、この頃はあの人達の氣が暴いので、なんだか怖くてなりません。

喜兵衛。　（起ちあがる。）え、私學校の人達が來ましたかえ。

娘甲。　あれ、あすこへ大勢來ました。

（熊藏と五助も起つて下のかたを見る。）

熊藏。　なるほど、十二三人もかたまつて押出して來たやうだ。

五助。　こつちの方角へ來るのでは、また火藥局へあばれに行くのではないか。

喜兵衛。　だん〳〵に增長して、日の暮れないうちから押出して來たとみえる。惡いところで出つく

はしたな。

娘甲。さあ、早く行きませうよ。

娘乙。行きませう、行きませう。

（娘ふたりは早々に上のかたに立去る。喜兵衛は提灯をかくすやうにして、不安らしく立つてゐる。下のかたより私學校の生徒石村賢次郎、二十二歳。相良治兵衛、二十四五歳。永山萬次、二十三四歳。雨倉彌太郎、二十五六歳。いづれも短き袴、高下駄にて、一刀をさして出づ。相良と雨倉は木の枝の太いステッキを持つ。そのあとよりも私學校の生徒七八人つゞいて出づ。）

石村。おゝ、車屋がゐた。おい、車屋、車屋。

熊藏。（おど〳〵しながら。）へい、へい。

石村。おれ達と一緒にそこまで行け。

五助。お乘りになるのでございますか。

相良。乘るのでない。空のまゝで挽いて行け。

熊藏。どちらへまゐるのでございます。

永山。そんなことを詮議せんでも可い。たゞ云ふ通りにすればいゝんぢや。

雨倉。早く行け、ゆけ。

相良。ぐづ〳〵しちよると、これくらはすぞ。（ステッキを振上げる。）

石村。まあ、亂暴をし給ふな。（車夫にむかつて穏かに。）おれ達の云ふ通りにすれば、金はちやんし拂つてやる。おとなしく附いて來たらどうだ。

車夫。（額を見あはせて。）へい、へい。

永山。さあ、早くゆけ。なぜ行かんか。（熊藏の腕をつかんで引つ立てる。）

雨倉。貴樣もゆけ。（五助を引つ立てる。）

石村。おまへ達に迷惑のかゝることではない。素直に行つてくれ。

相良。わい等、まだ判らんか。（再びステッキを振上げる。）

石村。まあ、待ちたまへといふのに……。こいつらをなぐつても仕樣がない。（車夫等に。）さあ、賴むから行つてくれ。ついそこの火藥局まで行つて、われ〳〵の積み出すものを學校まで運んでくれゝば可いのだ。

車夫。（再び額を見あはせる。）あの、火藥局でございますか。

喜兵衛。（思はず呟く。）あゝ、また火藥局か。

相良。誰ぢや、貴様は……。むゝ、造船所の小使か。

（喜兵衛はあわてゝ提灯を隠さうとするを、相良は見つけて取つておさへ、その提灯を奪ひ取る。）

雨倉。造船所の者なら知つちよるぢやらう。火薬局に番人が殖えたか。

喜兵衛。どうだか存じません。

永山。殖えたところで知れたもんぢや。（車夫に。）さあ、行け、行け。

相良。（喜兵衛に。）貴様はどこへ行く。

喜兵衛。あの、西田橋の方へまゐります。

石村。巡査に逢つても、なんにも云ふなよ。

相良。つまらんことを饒舌ると承知せんぞ。（提灯を投げ出して踏みやぶる。）

喜兵衛。（びつくりして。）はい、はい。

（喜兵衛は早々に下の方へ逃げてゆく。）

永山。（車夫に。）さあ、ゆけ。

雨倉。行かんか。

（熊藏と五助はよんどころなしに、梶棒を取つて車をひき出さうとする。上の方より森田金八郎、三十四五歳、羽織袴にて帽子をかぶり、靴をはき、丸腰にてステッキを持ちて出づ。）

森田。おゝ、みんな揃うてどこへ行く。

（石村等はみな一禮する。）

森田。車などに乘つてどこへ行く。學校の生徒が車なぞに乘ることを大先生から許されて居るのか。

石村。いや、この車に乘るわけではありません。これから草牟田まで出かけるのです。

森田。草牟田へ行く。（考へる。）いかん、いかん。そんな亂暴はもう止めにやいかん。戻れ、戻れ。

（石村等は顏を見あはせる。）

森田。先月の二十九日からゆうべまでに四日もつゞいて火薬局へ押掛けて、何萬發の彈藥を奪ひ出したものがある。それはみな學校の生徒の仕業であるといふことは、世間でも知つちよるぞ。西郷先生の留守はわれ〳〵が預かつてをる。お前等、そんな亂暴働〳〵と容赦せんぞ。

（一同は再び顏を見あはせる。）

森田。（ステッキにて車を指す。）彈藥をそれへ積んで持出すつもりか。まだ日も暮れん中からあまりに大膽なことをする和郎達ぢや。いかん、いかん。戻れ、戻れ。

相良。（すゝみ出づ。）でも、先生。あまりに残念でごはすから。

森田。なにが残念ぢや。

相良。火薬局も造船所もみな大阪へ移すといふぢやごはせんか。

森田。それは政府の命令ぢやで、仕方がないぢやないか。

永山。その政府の命令をおとなしく肯いてゐられますか。刺客を放つて西郷先生を暗殺しようとするやうな、東京の政府の命令を肯いてゐられますか。

森田。忌でも肯かんわけにや行かん。そこが我々の苦しいところぢや。

雨倉。その苦しいのをなぜ堪へんけりやならんのでごはすか。

相良。さうぢや。造船所の問題は兎もかくも、幾十名の警察官を鹿児島へ下して來て、西郷先生を暗殺させうとする……。

森田。いや、それは噂ばかりで、まだ確かには判らんぢやないか。

石村。判つたらば何うなります。先生、われ〳〵に教へてください。

森田。おれとても決まつた考へはない。桐野や篠原の人々ともよく相談した上のことぢや。いや、桐野や篠原がなんと云うたところで、肝心の西郷先生が動かねば何うにもならんことぢや。兎もかくもお前等はおとなしくして居らにやいかん。おれも頼む、おとなしくしてくれ。

一同。（澁々ながら。）はあ。

森田。ぢやが、お前等の心持はおれにもよく判つてをる。若い者どものぢつとして居られんのも無理はない。まことを云へば、おれも残念で堪らんのぢや。

一同。先生。（進みよる。）

森田。いや、急いちやいかん。何事も大先生の心まかせぢや。われ〳〵が勝手に動くべき時節でない。よいか。

一同。はあ。

森田。くどくは云はん。唯おとなしくしろよ。勿論、おとなしくするばかりが能ぢやない。時が來たらおれも遣る。

一同。遣りますか。先生。

森田。いや、なんでも可い。今日はおとなしく戻れ。

（一同は更に顔を見あはせる。）

森田。これはおれが悪かつた。今來た路を途中から眞直には戻られまい。こゝはこのまゝ通してやるから。（上のかたを指す。）これを川づたひに行つたらば、右へまはつて山の方から戻れ。かならず眞直に行つちやならんぞ。

相良。では、通して下さるのでごはすか。

森田。通してはやるが、今もいふ通り、どこまでも眞直に行つちやならん。かならず右へまはるんぢやぞ。

一同。はあ。

熊藏。では、わたくし共はお供をしないでも宜しいのでございますか。

四人。さあ。（躊躇する。）

森田。折角頼んだもんぢや。車屋も金貰はんぢや困るぢやらう。誰か乘つて行つてやれ。

永山。では、おれが乘る。

雨倉。おれも乘る。

（永山と雨倉は車に乘る。）

石村。（丁寧に。）では、先生。

一同。失敬しますぞ。

森田。眞直に行つちやならんぞ。

一同。はあ。

（石村と相良は先に立ち、永山と雨倉を乘せた車はあとに附き、他の生徒等もつゞいてゆく。）

森田。（あとを見送る。）はゝ、たうとう行き居つたか。どうで彼奴等、無事に右へまはつて戻る氣遣ひはあるまい。おれも役目で一旦は叱つたものゝ、まあ、勝手次第に遣るが可いわ。お、寒い、寒い。よいところに焚火がある。

（森田は焚火のそばに來て手をかざしてゐる。うすく風の音。雪すこしく降る。）

森田。（空を仰ぐ。）あゝ、どうでも雪かな。

（森田はそこに落ちたる造船所の提灯を見つけ、拾ひ取つて笑ひながら焚火に投げ込み、更に袂から莫入れから出して莫をすつてゐる。下のかたより星崎の娘お弓、十八歳、士族のむすめにて、梅の枝三四本を束ねたるを持ちて出づ。）

森田。星崎のお弓さん。寒いぢやごはせんか。

お弓。ほんにお寒いことでござります。

森田。あんたの家では餅搗はすませたか。

お弓。まだでございます。なんだか世間が騒がしいので遠慮して居ります。

森田。遠慮することはない、どし〳〵搗いたが可いぢやごはせんか。餡餅にしたら、わたしが一臼ぐらゐ振舞うて貰ひますわ。はゝゝゝゝ。時に兄貴の資正どんから此頃なにか便りがごはしたかな。

お弓。十日ほど前に便りがございまして、無事に鎭臺に勤めてゐるさうでございます。

森田。資正どんも好い若い者ぢやに、土百姓の鎭臺兵を相手にして、毎日鐵砲撃の調練して何になるかなう。もう好加減にやめて戻れば可いに……。あんた今度手紙をやる時に、さう云つて遣るがよからう。

お弓。兄に罷めて歸れと云ふのでございますか。

森田。さうぢや。熊本の鎭臺から早う戻つて來いと云ふてやるんぢや。あんなところに置くとあんたの兄貴の爲にならん。陸軍中尉ぐらゐ棒に振つても、こつちにはもつと面白いことがあるかも知れん。惡いことは云はんから、兄貴に戻れと云うて遣りなさい。

お弓。（その意を解せぬやうに。）こつちにはどんな面白いことがあるのでございませう。

森田。（笑ふ。）それはまだ云はれん。あんたも兄貴を可愛ゆいと思うたら、兎もかくも鹿兒島へよび戻すが可い。森田がよいことを敎へてくれたと云ふことは後でわかる。お母さんにも然う云うてな、一日も早う郵便を出しなさい。

お弓。はい。

（お弓はまだかんがへてゐる。上の方より石村賢次郎は足早に引返して來て、森田を見てあわたゞしく聲をかける。）

石村。先生、先生。早く來てください。ほかの者はみんな眞直に行きました。

森田。（うなづく。）やつぱり眞直に行き居つたか。

石村。あすこまで行くと、わたくしの止めるのも肯かないで、たうとう眞直に草牟田の方角へ行つてしまひました。

お弓。草牟田の方へ……。では、今日もまた火藥局の方へ行つたのではございますまいか。

石村。無論にさうです。初めから其積りで出て來たのですから。（森田に。）先生。早く行つて叱つてください。

森田。叱つても無駄ぢやよ。

石村。　でも、先生……。

森田。　（靜かに。）それよりもお前はなぜ行かんのか。

石村。　わたくしは初めから反對であつたのです。

森田。　反對……。（睨むやうにちつと視る。）

石村。　まつたく反對であつたのです。それですから先月以來、わたくしは一度もあの仲間には這入りませんでした。御承知の通り、火藥局の彈藥掠奪は今日が五回目で、わたくしにも今日こそは是非一緒に行けといふのです。忌だといへば、大勢で制裁を加へるといふので、よんどころなく出て來たのです。

森田。　でも、おまへは眞先に立つて來たんぢやないか。

石村。　無理に眞先に立たされたのです。貴樣は今夜が初陣ぢやから是非先頭に立つて行けと、みんなから無理に强られたからです。わたくしは初めからあんなことを好いとは思つてゐません。あんな無茶なことを遣れば、西鄕先生に叱られるに決まつてゐます。それでも大勢に强られて、仕方無しにこゝまで遣つて來ますと、丁度あなたにお逢ひ申したのです。

森田。　さうか。それで、ほかの者はみな押掛けて行つたか。

石村。　學校の方から山越しをして、すぐに出かけて行つたものもあるので、五六十人ほども一緒になつたやうです。

森田。　先生、早く行つて何とかして下さいませんか。

（冷かに。）今更どうなるもんぢやない。遣りたいだけ遣らすまでぢや。

石村。　うつちやつて置いても可いでせうか。（不安らしく上の方を見かへる。）

森田。　（叱るやうに。）まあ、いゝといふに……。

（石村はよんどころなく立停まる。雪また少しく降る。）

森田。　（空を仰ぐ。）おゝ、雪ぢや。お弓さん。あんたは澤山降らんうちに戻つたらどうでごはすな。

お弓。　はい。では、たんと降らない中にお別れ申します。石村さん。御めん下さい。

石村。　御めん下さい。

（お弓はゆきかけて、石村を鳥渡見かへり、そのまゝ上の方に去る。）

森田。　石村。なにを考へてをる。おまへも一旦同意して來たんぢやに、中途でなぜ自分だけ戻つて來た。

石村。　同意ではありません。無理に連れ出されて來たのです。そこへあなたが來て下されて、いろ〳〵御意見をうけたまはつたので、わたくしもいよ〳〵反對の決心を固めました。われ

森田。　われが無茶なことを遣れば、一から十までみんな西郷先生の御迷惑になるのです。そりやさうぢや。おれもお前等に意見した。しかし政府の方から忍びの者を放つて西郷先生を暗殺する。その卑怯な陰謀が若しほんたうだつたら、お前どうするか。

石村。　さあ。（考へてゐる。）

森田。　おまへは薩摩の人間でない。東京から西郷先生のあとを慕うて來て、この私學校の生徒になつたもんぢやで、薩摩の人間がどれほど大先生を尊敬して居るか、まだほんたうには判つて居るまい。

石村。　いや、判つてゐます。わたくしは鹿兒島に來てから、もう三年になります。

森田。　何年になつても他國者には判らん。わかつて居れば、お前ひとりが反對を唱へん筈ぢや。

石村。　途中から戻つては來ん筈ぢや。

森田。　でも、大先生の御迷惑になりましては……。

石村。　（嘲けるやうに。）そんなことを云うてゐる時節はもう過ぎたかも知れんぞ。

森田。　え。

（石村は森田の顏を見つめてゐる。下の方に、わや〳〵といふ聲して、飯原勝彌、鮫島新七、有馬銀之助、いづれも十八九歳。つゞいて二十歳前後より二十二三歳の青年十餘人。すべて私學校の生徒にて、袴をはきたるあり、洋服を着たるあり、帽子をかぶりたるあり、手拭にて頰被りをしたるもあり、思ひ〳〵の服裝にて棒または竹切などを持ちて急ぎ出づ。）

飯原。　さあ、おくれたぞ。早く行け。

鮫島。　夜になると敵も用心する。日の暮れんうちに不意擊ぢや。

有馬。　けふは思ひ切つて分捕をせにやならんぞ。

一同。　急げ、急げ。

（大勢はわや〳〵云ひながら上のかたに走り去る。）

森田。　はゝ、若い奴等は元氣ぢやなう。おれ達がこゝに居るのも知らんで、無我夢中で駈け出して行き居つた。どれ、おれも戻らうか。石村、いつまでもぼんやりしてゐて、河獺にでも化かさるゝな。

（石村はぢつと考へてゐる。森田は焚火のそばを離れて下の方へ行かうとする時、下のかたより僧西照、四十歳ぐらゐ、旅姿にて出づ。森田はすれ違ひて下のかたに去る。石村も起ち上りて、おなじく下の方へ行かうとする時、出合ひがしらに西照は聲をかける。）

西照。　あ、しばらく。少々物をおたづね申したうございます。

石村。　なんでございますか。

西照。　西郷先生の御住居はどちらでございます。

石村。　西郷先生の御邸は武村です。

西照。　西京から初めて下りましたので、一向に方角がわかりません。

石村。　武村へ行かれるには、この川に附いて行つて、西田橋を渡つて……。いや、初めてのお方には鳥渡知れにくいかも知れない。では、わたくしが御案内しませう。しかし先生はまだお歸りになるまいかと思ひます。

西照。　お留守でございますか。

石村。　先生は大隅の高山といふところへ行つて居られまして、二三日中にはお歸りになる筈です。まあ、兎もかくも御案内しませう。いらつしやい。

西照。　ありがたうございます。

石村。　（下の方を指さす。）こちらへ行くのです。

西照。　ほう、引返すのでございますか。

（石村は先に立ち、西照はあとに附きて下のかたに去る。上の方にて又もやわや〳〵といふ聲して、以前の相良治兵衛、永山萬次、雨倉彌太郎の三人が先に立ち、車夫熊藏と五助は彈藥の函をつみたる人力車をひき、私學校の生徒七八人がその後押しなどをしながら出づ。）

相良。　けふも大勝利ぢやつたぞ。

永山。　火藥局の奴等なぞ幾人居つても何うなるもんか。みな甄へて居つたぞ。

雨倉。　愉快、愉快。さあ、早く引揚げよう。

相良。　あまり學校へ持ち込むと、やかましく云はれる。川向ふの竹藪のなかへ埋めて置け。

一同。　さうぢや、さうぢや。

永山。　行け。行け。

（一同はわや〳〵云ひながら下の方に去る。雪又ちら〳〵と降る。上のかたより西郷隆盛、飛白の着物に兵兒帶をしめ、犬をひきて出づ。あとより僕虎吉、五十餘歳、尻を端折り、股引、草履にて、小包みを背負ひ、二三羽の鳥をさげて出づ。）

虎吉。　旦那樣、あれは學校の人達ではございませんか。

西郷。　むゝ。どうも學校の者らしい。若い者どもが何か騒ぎ立つるといふ噂を聞いたで、急いで

虎吉。　歸つて來たんぢやが、あいつ等は寄りあつまつて何をしちよるのかなう。

西郷。　どうも唯事ではないやうでございますな。

（眉をひそめる。）あれほど云ひ聞かして置くに、なにを騒ぐか。（考へながら二足三足あゆむ。）

虎吉。　はい。

虎吉。　はい。

西郷。　やがて江月が來るといふに、どこでも餅搗く音がきこえんな。

虎吉。　町はひつそりとして居ります。

西郷。　（又かんがへる。）思つたよりも世間は騒がしいと見ゆるなう。

（西郷は犬をひきながら徐に下の方へゆく。虎吉も不安らしく附いてゆく。雪少し降る。下のかたより小使の喜兵衛出で、西郷を見ておどゝしながら默禮すれば、西郷は立停まりて丁寧に會釋する。喜兵衛は虎吉にも默禮して、早々に上の方に去る。西郷はかんがへながら再び歩み出す。）

――幕――

第二幕

（一）

鹿兒島の市外、武村の西郷隆盛屋敷。質素なる古家にて、上のかたの床の間には世界の地圖をかけ、澤山の書物を積みかされ、小銃や刀なども置いてあり。床につゞいて出入りの襖あり。座敷のまん中には爐を切りてあり。縁のさきには梅の大樹ありて、花白く咲けり。上のかたは一面の竹藪。下の方も庭つゞきにて奥には畑のある心。

（第一幕とおなじ日のゆふぐれ。庭の下の方より僕市郎助、二十二三歳。僧西照と石村賢次郎とを案内して出づ。）

市郎助。　先づこちらへお通りください。

西　照。　御めん下さい。

石　村。　さあ、どうぞお構ひなく。

（西照と石村は縁に腰をかける。）

（市郎助に。）先生はいつ頃お歸りか判りませんか。

市郎助。なんでも二三日中にはお戻りと聞いて居りましたが、しつかりしたことはまだ判りませんのでございますよ。なにしろもう暗くなりました。唯今燈火を持つてまゐりますから、しばらくお待ちください。

（市郎助は奥に入る。西照はあたりを見まはす。）

西照。思つたよりも質素なお住居でござりますな。たとひ辭職なされても、陸軍大將西郷隆盛先生の御屋敷、定めて宏大なものであらうと存じて居りましたが、これでは屋敷といふは名ばかりで、まるで在所の田舍家でござりますな。

石村。まつたく田舍家でございます。先生も自分で鋤や鍬を持つて、畑仕事をしてゐられるのです。わたくしも初めて來た時には、實に案外なのに驚きました。

西照。あなたは御當地の方ではござりませんか。

石村。東京の者でございます。

西照。道理で、お詞の訛りが違うてゐると思ひました。やはり先生のお弟子でござりますな。

石村。はい。私學校に通つて居ります。

西照。東京から鹿兒島までお出でになるのはよく〳〵のこと。見ればまだお若い。せい〴〵御勉強なさるがようござりますぞ。

石村。はい。

（奥より市郎助はランプを點して出づ。）

市郎助。さあ、火がつきました。どうぞお上りください。けふはなか〳〵冷えるやうでございます。唯今すぐに爐を焚きます。

石村。おあがりください。

（西照に。）こゝは寒うございます。さあ、

西照。御主人のお留守に出まして、いろ〳〵御厄介になります。（草鞋をぬぎて上る。）

（石村も上る。市郎助は奥より焚木の籠をかゝへ出して、爐の火を焚く。）

市郎助。先刻ちら〳〵降り出しましたが、いゝ鹽梅にたんとも降らないやうでございます。

石村。先生の歸られるまでは、あまり降らしたくないものだが……。

（下の方にて犬の聲きこゆ。）

市郎助。あ、ぽんの聲だが……。

石村。むゝ、先生がお歸りになつたのかしら。

（石村と市郎助はあわてゝ庭に降り立ち、下の方に出て行かうとする時、西郷隆盛と虎吉とは第一

幕の姿にて出づ。）

石村。　おゝ先生。（敬禮する。）お歸りでございましたか。

市郎助。　お歸りなさいまし。（虎吉に。）ぢいや、御苦勞だつたな。

虎吉。　旦那樣が急に歸ると仰しやるので、いや大急ぎで隨分くたびれたよ。

石村。　先生。お客樣でございます。

西郷。　お客人は誰かな。

石村。　西京の清水寺から西照といふお方が……。

西郷。　なに、京の清水から……。何處に、どこに……。（座敷を見る。）おゝ、西照さん。よう來てくれた。懷しいなう。

（西郷は犬を捨てゝ、つか〳〵と緣に上り、爐のまへに坐る。石村もつゞいて上る。虎吉と市郎助は犬をひいて下の方に去る。）

西照。　西郷さん。お久しうござりました。

西郷。　やあ、何から云うていゝか判らん。先づあんたも無事で結構ぢやつた。（兩手をついて挨拶する。）これ、石村。

石村。　はい。

西郷。　お客さんに何か御馳走せにやならん。丁度鳥があるんぢやが、西照さんにや何うもいかんな。男どもにさう云うて、芋でも大根でも可い。ごた〳〵と暖かに煮て早う持つて來てくれんか。

石村。　かしこまりました。わたくしも手傳つてすぐに拵へさせます。（西照に。）どうぞ御ゆつくりお話しください。

西照。　かならずお構ひくださるな。

（石村は西郷にも一禮して奥に入る。爐の火だん〳〵に燃えあがる。）

西郷。　して、今度はどうして出て來られた。

西照。　師匠の御墓參にまゐりました。

西郷。　さうか、さうでごはしたか。（うなづく。）それは、それは、御奇特のことぢや。いつぞやもあんたに話した通り、月照さんの死骸は一旦都の城に葬つたが、その後にこの鹿兒島に改葬して、松原神社のそばに石碑が建てゝあります。それにしても、ようたづねて來て下された。あの時から見ると、あんたもえらう年寄つたなう。月照さんが存命のころには、西

照さん。あんたも今こゝにゐた若い書生ぐらゐで、可愛げな坊様ぢやつたが……。はゝゝはゝゝゝ。

西照。あの時は安政五年、今年であしかけ二十年になります。

西郷。（俄に形をあらためる。）さうでごはす。わたしも確かにおぼえてゐます。安政五年十一月十六日の晩でごはしたよ。

西照。わたくしはおそばに居りませんでしたが、重助ぢいやの話を聞きますと、大層月のよい晩であつたさうでござりましたな。

西郷。さうでごはした。十六日の月が鏡のやうに光つて居りました。

西照。船に乗つてゐたのは、あなたとお師匠様と、平野次郎どのと重助との四人で、この薩摩の沖へ漕ぎ出して、月をみながら面白さうに酒を飲んでゐられたと聞きました。

西郷。酒飲んで、面白さうに詩など吟じてをりましたよ。

西照。そのうちにあなたが不意に起ちあがつたかと思ふと……。

西郷。おゝ。わたしが月照さんをしつかり抱へて……。（思はず抱く眞似をする。）

西照。あつと云ふ間に、ふたりとも海のなかへ……。

（ふたりは顔を見あはせて暫く無言。尺八の聲遠くきこゆ。やがて西郷は吐息をつく。）

西郷。坊様でも月照さんは偉い勤王家ぢやつた。それを幕府に睨まれて、なにぶんにも探偵がきびしいので、月照さんはどうしても逃れることは出來ん。やうくのことで此の薩摩まで落ちて來たのを、わたしも出來るだけは隱まうて見たが、もうわたしの手には負へなくなつて來た。さりとて月照さん一人を見殺しには何うも出來んので、わたしも一緒に死ぬことに決めた。さうして、今も云ふ通り、平野と重助との隙を見て、ふたりが抱き合うたまま海へ飛び込んだが……。（再び嘆息する。）人間の運は判らんもんぢや。二人ともに引揚げられて、わたしは息を吹き返したが、月照さんは駄目ぢやつた。（悲しさうに眼を瞑ぢる。）

（西照は默して珠數を爪繰る。尺八の聲つゞけてきこゆ。）

西郷。それから二十年、わたしはよう生きてゐたものでごはすなう。

西照。その時あなたを殺さずに、王政復古の大業を成就させたのも、みな御佛の御指圖でござりませう。生きるも死ぬも自分の思ふがまゝにはなりますまい。

西郷。王政復古の大業もわれ〳〵の力ばかりで成就したのではごはせん。日本中の人の心が一つにあつまつて、おのづと大きい力になつたのでごはす。それを自分達ばかりの手柄と思う

てゐたら大きな間違ひぢや。（感ずる所があるやうに云ふ。）それで困るのでごはす。

西照。　して、唯今では專ら學校の方に御盡力でござりますか。

西郷。　御承知かも知れんが、征韓論が用ゐられんので、わたしも桐野も篠原もみな辭職して國へ戻りました。わたしは百姓になつて一生を終るつもりぢやが、若い者どもはそれぢやならん。誰も彼もせい〳〵勉强して、國家のために竭さにやならんと思ふので、私學校も作りました。賞典學校や幼年學校も作りました。かうして、若い者のだん〳〵生ひ立つてゆくのを樂みに、なにかの世話を燒いてをるのでごはすが、西照さん、若い者といふものは可愛ゆいもんですぞ。（笑ふ。）わたしのやうな者でも先輩ぢやと思うて、先生とか西郷どんとか云うてな、みな慕うて來よりますわ。

西照。　あの石村といふ人は東京から來たのださうでござりますな。

西郷。　東京から來て居るものも二三人あります。まだそのほかにも和歌山、彦根、遠いところでは庄内、秋田などからも來てをります。若い者のことでごはすから、些とは亂暴も遣りますが、わたしが叱ればすぐに止めます。まつたく可愛ゆいもんでなう。

西照。　（少しかんがへて。）あなたが叱れば何事もやめますか。

西郷。　（笑ひながら首肯く。）そりや止めますわ。

（西照はまだ不安らしく考へてゐる。下のかたにて犬の吠ゆる聲きこゆ。）

西郷。　（外を見る。）おゝ、誰か來たかな。

（下のかたより市郎助に案内されて、桐野利秋、四十歳、洋服に長靴をはき、外套をきて、森田金八郎と連れ立ちて出づ。）

市郎助。　桐野樣と森田樣がおいでになりました。（云ひすてゝ立去る。）

西郷。　桐野さん森田さん、揃うて來たか。まあ、上れ、あがれ。

桐野。　あんたが戻られたと聞いて、すぐに出て來ました。

森田。　大層お早うごはしたな。

（二人は上にあがる。）

桐野。　（西照を見かへる。）この坊樣は……。

西郷。　わしと心中した京の清水の坊樣のお弟子ぢや。

森田。　月照さんのお弟子でごはしたか。

西照。　いかにも月照の弟子でござります。西郷さんとは古いおなじみで、西郷と月照、その一字

づつを頂いて西照と申すものでございます。（會釋する。）

桐野。　わたしは桐野利秋。

森田。　わたしは森田金八郎でごはす。

西郷。　（二人に。）みんなはもう夕飯食うたかな。まだなら丁度可い。今なにか西照さんに御馳走するところぢや。一緒に食はんか。

桐野。　（金八郎と顏を見あはせる。）いや、飯はもう食うて來ました。實はあんたに用談があつて來たんぢやが……。（西照の手前を憚る。）

西照。　御用談とあれば、わたくしはあちらへ御遠慮申しませう。

西郷。　いや、遠慮するほどのことぢやごはすまい。なう、桐野さん。

桐野。　むゝ。（再び金八郎と顏を見あはせる。）

（奥より虎吉出づ。）

虎吉。　旦那樣。御飯のお支度が出來ました。

西郷。　さうか。それぢや此の西照さんをそちらへ案内して、たんと御馳走してくれ。

虎吉。　では、どうぞこちらへお出でください。

西照。　折角なれば御馳走にあづかりませう。皆さん、御めんください。

（西照は虎吉に案内されて奥に入る。それを待兼ねたやうに、桐野と森田は膝をすゝめる。）

桐野。　西郷さん。聞いたか。

西郷。　なにか。

森田。　學校の生徒の一件でごはす。

西郷。　むゝ。それを聞いたで、急いで戻つて來た。どうも困つたことを遣るなう。わしがあれほど賴んで置いたに、あんた等なぜ取鎭めてくれんのか。

桐野。　（頭をふる。）殘念ぢやが、もういかん。

西郷。　（聞き返すやうに。）いかん。

森田。　われ〳〵が何ぼ取鎭めようとしても、迚もいかん。何事をするにも兵器彈藥がなうては叶はんといふので、先月の二十九日から毎日毎晩火藥局へ押掛けて、彈藥どもを片端から持ち出して來居りますわ。

西郷。　彈藥を持ち出して何をするか。

森田。（聲強く。）西郷先生のために死ぬんぢやと云うて居ります。

西郷。むゝ。（眼を瞑ぢてかんがへてゐる。）困つたなう。

桐野。生徒どもが激昂するも無理はごはせん。東京から色々の奴どもが四十人も一度に歸省すると云うて鹿兒島へ戻つてくる。さうして、中央政府となにか祕密の暗號電報を遣り取りして居る。かれらの擧動がどうも怪しいと云ふんで、生徒のうちでも氣の早い者がその二三人を引捕へて詮議すると、初めのうちは強情張つて居りましたが、たうとう何も彼も白狀しましたわ。

西郷。白狀した……。

森田。政府の内命をうけて、西郷先生を暗殺に來たと殘らず白狀しました。

西郷。（疑ふやうに。）政府でもまさかにそんな卑怯なことしやせんぢやらう。生徒どもが拷問して心にもないことを無理に云はせたんぢやないかな。

桐野。いや、さうぢやごはせん。それから一人も殘さずに引捕へて、一々に詮議しましたら、どれもみな同じやうに白狀しました。

西郷。（まだ疑ふやうに。）まつたく白狀したかな。どうもそれがわしには判らん。なぜ中央政府がわしを殺さうとするか。

森田。佐賀の暴動、熊本の暴動、それからそれへと引きつゞいて、九州一圓は穩かならん空氣につゝまれて居ります。この鹿兒島にも何時何事が起らうも知れんと云ふので、政府も大いに警戒して、現に造船所も火藥局も大阪へ移さうとして居るくらゐではごはせんか。そこで……。

西郷。さあ、それぢやから私には猶判らん。今もいふ通り、佐賀といひ、熊本といひ、諸國に士族の暴動が起つて、九州一圓が穩かでない。その最中にこの鹿兒島ばかりが鎭まり返つてゐるのは誰の力ぢや。この西郷が兩手でしつかりと押さへ付けてゐるからぢやないか。その西郷を殺してしまうたら何うなるか。中央政府には岩倉さんも居る、木戸も居る、大久保も居る。そのくらゐの理窟のわからん筈がない。（打笑む。）はゝ、それは何かの間違ひぢやよ。

桐野。あんたは自分の正直にひき比べて、なんでも物事を眞直に考へらるゝが、世の中はなかなか然うでごはせん。油斷したら足下から鳥が起つ。なう、森田。さうぢやないか。（眼で知らせる。）

森田。（うなづいて進み出づ。）西郷さん。決心してお起ちください。

西郷。なんぢや、だしぬけに……。

森田。もう彼是れ云うてゐる時節ぢやごはせん。私學校の生徒は勿論、薩摩大隅二萬人の士族は、あんたが一度手をあげたら、一度にあつまつて來るのでごはすぞ。

西郷。（氣色を變へる。）なにをいふか。西郷に謀叛せいと云ふか。

桐野。（靜かに。）謀叛ではごはせん。中央政府の罪を糺すのでごはす。

西郷。罪を糺すなら私ひとりで東京へゆく。一萬人二萬人の多人數を引連れて行くにや及ばんぢやないか。西郷暗殺の陰謀が萬一ほんたうとしても、その罪を糺すためには私一人が東京へ出て行つて、おだやかに談判すれば濟むことぢや。手をあげるも旗をあげるも要ることぢやない。迂濶なことして叛賊の名を負うたらどうするか。

森田。あんたは一人で東京へ行かれますか。

西郷。勿論ぢや。萬一の場合には私ひとりで行く。

桐野。（いよ〳〵靜かに。）あんたが行くと云うても、ほかの者が迚も出してやることぢやごはせん。あんた一人を出してやつて、萬一のことがあつたら何うしますか。

森田。あんたが出て行く場合には、われ〳〵がみなお供します。御邪魔でもお連れください。あんたがなんと云はれても、あんた一人で東京へ出してやることはなりません。第一に學校の若い者が承知することぢやごはせんぞ。

西郷。まあ、待て。そのやうに力んでも、肝心の暗殺の一件がまだ嘘とも本當とも判らんぢやないか。

森田。いや、判つてをります。本人どもが白狀してゐる以上、これほど確かなことはごはせん。

西郷。その白狀がまだ當てにならん。わしも好く考へる。あんた等ももう一度かんがへ直してくれ。

二人。はあ。（顏を見あはせる。）

西郷。あんた等も知つてゐる通り、今夜はめづらしい客人がある。久振りでゆる〳〵と昔話でもしたい。氣の毒ぢやが、もう歸つてくれんか。

二人。はあ。

西郷。くどいやうぢやが、若い者どもを取鎭めるのはあんた等の役ぢや。無暗な亂暴したら西郷が堪忍せんと云うてください。

桐野。承知しました。では、お暇しようかな。

森田。失禮いたしました。

（二人は失望したやうに起ち上る。）

西郷。あんた等、先立になつて生徒どもを煽動するやうなことはあるまいな。

森田。煽動どころぢやごはせん。取鎮めるに苦んでをります。

（西郷はうなづく。二人は一禮して、下の方にゆく。西郷は緣に立出でゝ見送る。）

（二）

西郷屋敷の門前。上の方によせて粗末なる竹の門。左右は竹藪にて、その裾に溝のやうな流れあり。門前に小さき石橋を架く。

（門内より桐野と森田出づ。）

桐野。（門内を見かへる。）おやぢ、なか〳〵動かんなう。

森田。なにしろ律義一方の人ぢやからなう。

桐野。ぢやと云うて、もうぢつとしては居られんぢやないか。佐賀や熊本の時に、われ〳〵も一緒に起てばよかつたんぢやが、おやぢが腰を据ゑて動かんもんぢやから、到頭機會を逸してしまうた。併しまだ遲いことはない。われ〳〵が決心して起つ以上、佐賀や熊本のやうな見苦しい失敗はせんぞ。

森田。それに付けても、何とかしておやぢに一肌ぬいで貰はにやならんが、桐野さん、どうかならんかなう。

桐野。いや、どうにかなる、屹とどうにかなる。おやぢは涙脆い男ぢや。學校の生徒一同が先生のために死にますと、命をなげ出して泣いて口說けば、おそかれ早かれ屹と動く。唯その時機の問題ぢやよ。

森田。その時機を取逃すと、どうにもならんからなう。下らん奴等が政府に跋扈して、われ〳〵士族が町人や土百姓の仲間入りをするのは殘念ぢやごはせんか。

桐野。（歩きながら。）それは誰も考へて居ることぢや。それぢやから我々が動けば、そこでもこゝでも一度に起つてくる。

森田。（列んで歩きながら。）われ〳〵が先づその烽火をあげるのでごはすな。

桐野。おやぢがいくら落着いて居つても、機運はもう動いて居るんぢや。

森田。こゝでまた機會を逸したら何うにもなりませんぞ。

桐野。さうぢや、さうぢや。

（二人は話しながら向ふへあゆみ去る。犬の吠ゆる聲、鳥の羽搏きの音。門内より虎吉は提灯をつけて出で、あたりを照して視る。）

虎吉。なんだかさうぐ〳〵しい晩だな。

（虎吉は不安らしくあたりを見まはしてゐる。）

（三）

もとの屋敷。

（西郷は爐の前に坐つてぢつと考へてゐる。奥より西照出づ。）

西照。どうも御馳走になりました。

西郷。おゝ、なにか食うて來ましたか。薩摩料理は旨うないもんぢやが、取分け西郷の家の手料理はまづいでな。はゝゝゝゝ。まあ、話しませう。おあたりなさい。

（西郷は起つて焚木の籠を持ち來り、爐にくべる。）

西照。石村さんといふ人のお給仕で、十分に頂戴しました。

西郷。石村が給仕しましたか。

西照。おとなしいお人でござりますな。

西郷。（笑ふ。）はあ、鹿兒島の奴はみんな亂暴ぢやで、そのなかに他國の人間がまじると、大層おとなしく見えますわ。

西照。そのお給仕のあひだに色々のお話を聞きましたが、何かこゝらは物騒がしいさうでござりますな。

西郷。（事もなげに）石村がそんなこと云ひましたか。

西照。石村さんのお話ばかりでなく、わたくしも途中で見て來ました。あなたにも定めて御心配のことゝお察し申して居ります。

西郷。はあ。なに、大したことでもごはせん。若い者が些とばかり騒ぎますさうで……。

西照。先刻のお話では、あなたが叱ればすぐに止めるといふ。早く叱つて止めさせては何うでござりますな。われ〳〵どもが差出たやうではござりますが、この頃の世の中をみまするに、

なんとなく人の心が穏かでござりません。廢藩置縣になりましても、士族はやはり昔の士族の心で、四民同等の御趣意がまだほんたうに行き渡らぬやうにも考へられます。したがつて、地方の士族達は何かにつけて不平が多く、機會があれば騒ぎ立てようと待ちかまへてゐるやうな風も見えます。

西郷。（うなづく。）まつたく御説の通りでごはす。先頃の佐賀も熊本もつまりは皆それです。

西照。さういふ時節でござるから、些細なことでも口火を切ると、それがやがて大きな禍にもなり兼ねません。失禮でござるが、あなたは兎かく人情に弱いお人で、それはわたくしの師匠と一緒に死なうとせられたのを見ても判ります。師匠は兎も角も、あなたは死ぬにも及ばぬところを、どうも師匠ひとりを殺すには忍びないと云ふやうな心から、最期の道連にならうとなされた。そのお心があなたの美しいところでもあり、また弱いところでもあつて、よく氣をおつけなさらぬと見す〳〵深みへはまるやうなことが無いとも限りません。だん〳〵の樣子を見まするとと、今が大事の時節のやうにも思はれます。どうぞお心を強くお持ちください。いや、これがまことに釋迦に説法、とんだお饒舌をいたしました。昔からのお馴染甲斐に、かならず悪くお聞きくださるな。

西郷。（耳をかたむけて聽く。）いや、よう判りました。あんたこそ昔の馴染甲斐によう意見してくだされた。今が大事の時節といふことは、わたしも知つて居ります。友達がなんと云はうとも、生徒どもが何と云はうとも、西郷は滅多に動くことぢやごはせん。安心してください。

西照。それをうけたまはつて、わたくしも安心しました。あの石村さんもひどく心配してゐられるやうでござりました。

西郷。石村もそんなに心配して居りますか。（ほろりとして。）若い者は皆わたしを思うてくれます。西郷のためには死ぬとまで云うてくれます。

西照。その可愛ゆい若い者を善い方へ導くのがあなたの務でござりますぞ。

西郷。（眼を拭きながら。）さうでごはす。さうでごはす。

（向ふにて喇叭の聲きこゆ。）

西照。あ。（耳をかたむける。）

（喇叭の聲つゞけてきこゆ。西郷は起つて縁先に出る。）

西郷。なんぢや、あの喇叭は……。

（下の方より虎吉は提灯を持ちて出づ。）

虎吉。　旦那樣。學校の生徒たちが大勢で隊を組んで、喇叭をふいて町中を押廻して居ります。

西郷。　日が暮れてから喇叭を吹いて町中を押しあるく。困つた奴等ぢやなう。桐野や森田は何をしてをるか。

（下の方より石村出づ。）

石村。　先生。學校の生徒達がどうも穩かならん樣子でございます。

西郷。　（舌打して。）いかん、いかん。お前早う行つて桐野や森田にも知らせて來い。途中で生徒どもに逢ふたらば、わしの指圖ぢやから斷然やめいと云へ。

石村。　はあ。（引返して走り去る。）

虎吉。　（空を仰ぐ。）あゝ、又ちら〳〵降つて來ました。なんぼ若いと云ひながら、學校の人達も雪のふる晩に何を騷いでゐるのか。

西照。　このくらゐの騷ぎで濟めばよろしいが……。なあ、西郷さん、

西郷。　はゝ、大丈夫ぢや。大丈夫でごはす。

（西郷は笑ひながら首肯く。西照は珠數を持ちて不安らしく考へてゐる。喇叭の聲。雪ふる。）

——幕——

第三幕

（一）

第二幕の西郷屋敷門前。二月十七日の朝。五十年來といふ大雪一面にふり積れり。

（僕市郎助が門前の雪を掃いてゐる。）

市郎助。　どうしてこんなに降るのかなあ。惡いときに毎日降るものだ。

（門内より虎吉は詰襟の小倉の洋服の上に兵兒帶をしめ、脚袢、草鞋にて、手拭をかぶりて出づ。）

虎吉。　これ、市よ。雪搔きはもう好加減にして奥へ來てくれ。こつちには色々の用があるのだ。

（市郎助は默つて雪を掃いてゐる。虎吉は進みよる。）

虎吉。　これ、市よ。貴樣は急につんぼうになつたのか。奥が忙しいから早く來いと云ふのだ。

市郎助。　奥の御用はおぢい一人でするが可い。おれにはおれの用があるのだ。

虎吉。　はゝあ、判つた。貴樣は今度のお供が出來ないので、おれに八つ中りをするのか。はゝ、

市郎助。　怒るなよ。何事も旦那様の御指圖だから仕方がないわ。

なんぼ旦那様の御指圖だと云つて、年の若いおれに留守番をさせて、年を取つたおぢいを軍につれて行く。そんな間違つたことがあるものか。何だかおれが腰抜けのやうで、世間に顔向けが出來ないのだ。

虎吉。　さう膨れつ面をするなよ。旦那様は誰も連れて行かないと仰しやつたのを、無理におねがひ申しておれだけがお供をすることになつたのだ。どうして、どうして、留守番の方が大役で、三匹の犬の世話から畑の仕事、なか〳〵一人では忙しいぞ。ゆうべも旦那様が、市郎助には留守をしつかり賴むと仰しやつたではないか。

市郎助。　(考へる。)それもさうだが、どうも留守番は氣がないなあ。

虎吉。　ぐづ〳〵云つてゐないで、早く來てくれ。旦那様はもうお出かけになるのだ。さあ、早く來い。

(虎吉は無理に市郎助を引張つて門内に入る。下のかたより蓑笠の百姓二人出で、門前にて笠を取り、丁寧に一禮して、上のかたへ通り過ぎてゆく。門内より永山萬次と雨倉彌太郎は小倉袴、高下駄にて頬被りをし、雪をぶつけ合ひながら出づ。)

永山。　は、、弱い奴ぢや。雪礫どころぢやない、ほんたうの鐵砲玉はもつと痛いぞ。

雨倉。　なんの、貴様に負くるもんか。貴様なんぞの相手には、土百姓の鎭臺兵が相當ぢや。

(ふたりは捨臺詞にて、門前の雪を投げ合つてゐる。門内より石村賢次郎、おなじく小倉袴、高下駄にて出づ。)

石村。　諸君。早く支度をしないと遲くなる。先生はもうすぐにお出かけになりますぞ。

永山。　え、、そんなことは貴様が云はんでも知つちよるわ。

雨倉。　餘計な指圖するな。生意氣な奴ぢや。

石村。　指圖するのぢやない。遲くなるから注意するのだ。

永山。　そんな注意は受けんでも可い。東京者はまつたく生意氣でいかん。われ〳〵の裏切をして怪からん奴ぢや。

石村。　僕がなんの裏切をした。

雨倉。　では、この間われ〳〵と一緒に火藥局へ出て行きながら、なぜ途中から引返した。

永山。　おまけに森田先生に逢うて、われ〳〵を叱つてくれと密告したぢやないか。

雨倉。　貴様は重々不埒な奴ぢや。おほかた東京政府の廻し者ぢやらう。

石村。なに、東京の廻し者だ。君達こそ不埒なことを云ふな。僕がどんな人間かと云ふことは、西郷先生がよく御存じだ。

永山。先生は正直なお人ぢやから、貴樣のやうなおべつか者にだまされて居るんぢや。

石村。僕達にだまされるやうな先生と思ふか。

雨倉。なにをぬかす。這奴、忌々しい。雪漬けにしてしまへ。

石村。馬鹿なことを云ふな。

（永山と雨倉は石村をねぢ倒せば、石村は刎ねかへし、三人は雪のなかを轉げながら揉み合つてゐる。門内より虎吉は再び出で、この體を見て舌打しながら、市郎助が置き捨てゝ行きたる雪かきの高箒を把りて、轉げてゐる三人を片端からなぐり付ける。）

虎吉。なんだ、ばかぐしい。これから大事の軍に出かけるといふ矢先きに、同士擊の喧嘩なぞしてゐて何うするのだ。馬鹿も好加減にして、早く支度をさつしやい。

永山。むゝ。先生の支度はもう出來たか。

虎吉。旦那樣は御支度が出來て、もうすぐにお出かけだ。

（三人おどろく。）

雨倉。や、こりやいかん。早う學校へ歸つて支度せにやならん。

永山。こんなこと先生に默つてゐてくれ。

（その内に石村は無言にて跳足のまゝ下のかたへ走り去る。）

永山。や、あいつ。又ぬけ駈けをし居るぞ。

雨倉。おくれん中に早う行け。

（永山も雨倉も跳足にて下の方へ駈けてゆく。虎吉は笑ひながら三人の下駄を拾ひあつめてゐる。上のかたより農家の女一人出で、門前にてうや〳〵しく一禮して行きかゝる。）

虎吉。おゝ、お勝さん。よく降るな。

女。困つたものでござります。

（女は下のかたに去る。虎吉も下駄を持ちて門内に入る。下のかたより星崎の娘お弓、士族のむすめ四人と出で來り、やはり門前にて一禮し、竊と門内をうかゞつてゐる。門内より森田金八郎は、陸軍大佐の軍服、軍帽にて外套をつけ、長靴をはきて出づ。）

お弓。（會釋する。）お早うございます。いよ〳〵今朝御出發でございますか。

森田。はあ。いよ〳〵出かけます。雪がよく降りますなう。時にお弓さん。兄貴からはまだ何に

も云うて來んかな。

お弓。（愁はしげに。）はい。

森田。いよ〳〵敵になるかなう。あんたの兄貴ばかりぢやない、熊本の鎭臺には鹿兒島の者が澤山行つて居る。みな何うするのかなう。まあ、行つてみたら判るでごはせうよ。

お弓。熊本でも軍があるのでございませうか。

森田。無いとも云へんな。（打笑む。）司令長官の谷といふのも、一筋縄では行かん奴らしいからなう。まあ、ようごはすわ。敵になつても味方になつても、熊本であんたの兄貴に逢ひませうわ。わたしは急ぐ。これで御めん下さい。

（云ひすて、森田は向ふに去る。お弓はぢつとあとを見送る。雪少しく降る。）

（二）

鹿兒島舊城内の練兵場。正面には外堀の堤、その上には松の立木みゆ。舞臺にも上の方によせて松の大樹あり。おなじ日の朝、こゝにも雪一面にふり積れり。

（士族の母、妻、娘等十五六人、男の兒三四人、雪のなかに立ちて上の方をながめてゐる。上の方にて喇叭の聲きこゆ。）

妻一。八時を合圖に繰出すと云ひますから、もうやがて出て來るのでございませう。

娘一。さうでございます。一番隊は一昨日、二番隊は昨日、みんな八時を合圖に出ましたから、今朝も遲れることはございますまい。

母一。わたくしどもの悴は二番隊で、きのふの朝出發しました。

娘二。わたくしの兄も御一緒に昨日出ましたが、もう何の邊まで行つてゐるでございませう。

妻二。なにしろ此の大雪では嘸ぞ道中も難儀であらうと思ひやられます。

小兒。（口々に。）おいどんも軍に行きたいなう。

妻一。今度の軍には十五から上でなければ出られないのです。

小兒。この軍が長くつゞけばいゝなう。

虎吉。（下の方より西郷の僕虎吉は前のすがたにて、脇差を一本差し、風呂敷づつみを斜めに背負ひ、腰には網袋と穿きかへの草鞋を下げ、竹笠を持ちて走り出づ。）大勢を押分けながら。）さあ、さあ、退いてください、退いてください。大急ぎだ。

妻一。　おゝ、西郷さんのところの虎吉どのか。

娘一。　おまへも一緒にお供するのでございますか。

虎吉。　（自慢らしく。）知れたことでございますよ。時にみんなはもう繰出しましたか。（上の方をのぞく。）

妻二。　いゝえ、まだ一人も見えません。

娘二。　わたし達も先刻からこゝに待つてゐるのです。

虎吉。　やれ、やれ、安心した。市郎助の奴めが意氣地がないので、家を片附けるのが手間取つて、時刻におくれるかと胸がどき〳〵しました。

母一。　あいにくに雪が降つて困りますな。

虎吉。　鹿兒島でこんなに雪の降ることは珍しい。舊曆の暮にも二三度降つて、元日から又三日も四日も休みなしに降りつゞけてゐるのは、なんでも五十年來の大雪だといふことでございますよ。

妻一。　かういふ事のある前兆かも知れません。

虎吉。　そんなことを云ふ者もありますが、かういふ時に大雪の降るのは目出たいしるしだと云つて、學校の人達はみんな喜んでゐますよ。皆さんもまあ祝つてください。

一同。　お祝ひ申します。

虎吉。　ありがたうございます。

娘一。　ほんに誰かに上げようと思つて持つて來たのですが、これを爺やさんにあげませう。（帶のあひだより守札を出す。）

虎吉。　これは厄除の御守でございますね。ありがたうございます。（押頂く。）

（喇叭の聲又きこゆ。雪ふる。）

虎吉。　おゝ、いよ〳〵繰出すと見える。ぐつ〳〵してゐると旦那樣の大きい眼玉で睨まれるぞ。（虎吉は上の方の奥へ走りゆく。それと入れちがひに、上の方より星崎の娘お弓と以前の娘四人が足早に出づ。）

お弓。　おゝ、皆さんもお見送りでございますか。

妻一。　いよ〳〵もう出發でございますか。

お弓。　はい。今の喇叭が進軍の合圖でございます。（うしろを見かへる。）あれ、あれ、もう學校の門から繰出してまゐりました。

一同。　おゝ、來る、來る。

（人々は伸びあがりて見る。その内に、見送りの人々が更に數增して、町家の男や女もまじり、左右に立ちならびて出發を待つてゐる。喇叭の聲、雪はげしく降る。上のかたより相良治兵衞と永山萬次が先に立ち、そのあとより生徒の兵士數十人は銃を荷ひて出づ。兵士は洋服の上に白の兵兒帶をしめて大小を差し、右の袖に合印の白布をむすび、白の脚袢、草鞋にて、腰には網袋と草鞋をさげ、思ひ〳〵の帽子をかぶつてゐる。相良と永山の服裝もみな同じ。この一隊が進行し來れば、待ち受けたる人々は一度に敬禮す。一隊はそのあひだを眞直に向ふへ進み去るを、人々は緊張したる心持にて無言に見送る。

少しく間。やはり上の方より雨倉彌太郎と飯原勝彌が先に立ち、兵士數十人がおなじく銃を擔ひて出づ。人々は再び無言にて敬禮す。この一隊も雪を衝いて向ふに進み去る。

少しく間。上のかたより鮫島新七と有馬銀之助が先に立ち、少年隊廿餘人を率ゐて出づ。少年は銃を背負ひ、手には木の枝を持つ。人々は無言にて敬禮す。この一隊も向ふに進み去る。

雪ます〳〵降りしきる。上のかたより西郷隆盛は紺飛白の筒袖、白の兵兒帶に大小をぶつ込み、尻を端折りて脚袢、草鞋、大いなる竹笠をかぶり、太き杖を持ちて出づ。そのあとに洋服脚袢の從卒二人と虎吉が附き添ふ。又そのあとより石村賢次郎は矢はり洋服脚袢にて、「新政厚德」の旗竿を持ちて出づ。人々は西郷を見て、うや〳〵しく敬禮す。）

西郷。（にこやかに。）やあ、ありがたう。雪のふるのに皆んな好う見送つてくださるな。

一同。おめでたうございます。

西郷。はゝ、ありがたう、ありがたう。（笑ひながら會釋する。）これ、石村。

石村。はあ。

西郷。盛に降るなう。

石村。一番隊はもう三太郎峠にかゝりましたらうか。

西郷。さうかも知れん。あの峠はなか〳〵えらいぞ。

（下の方より大勢をかき分けて、士族進藤の妻お幾、三十四五歳、悴勇吉の手をひいて出づ。勇吉は十五歳の少年、洋服脚袢にて武裝してゐる。）

お幾。西郷さん、西郷さん。

西郷。おゝ、進藤さん。あんたもわざ〳〵見送りに來て下されたか。ありがたうごはす。

お幾。お見送りばかりではございません。この勇吉もお供をさせて頂きたいと存じまして……。

西郷。ほう、勇吉どんも軍に行くか。

お幾。　主人が存命でござりましたら、無論にお供するのでござりますが、御承知の通り、昨年の冬になくなりまして……。

西郷。　さうぢや。源之進さんまだ若いのに氣の毒ぢやつた。

お幾。　就きましては主人の名代に、この勇吉をお連れください。年のゆかぬ者で、却つてお邪魔でもござりませうが、當人も達てまゐりたいと申します、わたくしも遣りたいと存じます。どうぞ連れて行つて遣つて下さるやうに、お願ひ申しに出ました。

勇吉。　先生。わたくしもお供をさせてください。お願ひ申します。

西郷。　むゝ。よい、よい。進藤のお母さん、勇吉どんは西郷があづかりました。どこまでも連れて行きます。われ〳〵が東京に乗込むのは四月頃でごはせう。勇吉どんに東京の花見をさせませうわ。

お幾。　なにぶん宜しくお願ひ申します。そこで、西郷さん。熊本はどうでござりませう。無事にあなた方を通しませうか。

西郷。　（事もなげに。）はゝ、通さんと云うても打破つて通りますわ。熊本の鎭臺と云うたところで、多寡が土百姓の徵兵ぢやごはせんか。こつちはみな薩摩の士族どもでごはす。案山子も同

樣の鎭臺兵など片端から蹴散してしまひますわ。はゝゝゝゝ。

（上の方より桐野利秋は陸軍中將の軍服、軍帽、外套をきて劍をつけ、長靴をはき、青竹の杖を持ちて出づ。あとより森田金八郎は前の服裝にて、ステッキを持ちて出で、そのあとに喇叭卒二人と生徒の兵卒大勢附き添ふ。人々はこれを見て又もや敬禮す。）

桐野。　（愉快らしく。）やあ、皆さん、ありがたう。（擧手の禮をする。）士族屋敷の男どもは皆出てしまうて、あとに殘るのはあんた方の女子と子供ばかりぢや。留守をよう賴みますぞ。

森田。　その代りには東京の土產物たんと買うて來てあげますわ。（勇吉を見る。）やあ、勇吉どん。あんたも行くか。

お幾。　西郷さんにおたのみ申してお供させて頂きました。

森田。　や、えらい、えらい。（進み寄りて勇吉の頭をなでる。）よか兒、働かにやいかんぞ。はゝゝゝ。

桐野。　進藤のお母さん、見てください。土百姓の鎭臺兵など叩きまくるに劍は要らん。この青竹で澤山ぢや。城山で狸狩するやうなもんぢやでなう。はゝゝゝゝ。

お幾。　その狸狩のお仲間入りがしたいものでござりますな。

森田。あんたは不斷から氣の強いお母さんぢや。かういふ時には羨ましからうなう。

お幾。お察しください。女にも出來るやうな御用がござりましたら、何時でもお手傳ひにまゐります。

桐野。（衣兜より時計を出して見る。）もう八時を十五分ほど過ぎた。先發隊におくれん中にそろ〳〵出かけにやいかん。西郷さん、どうでごはすな。

西郷。むゝ。もう出かけにやいかん。石村、旗を立てんか。

石村。はあ。（卷いたる旗を立てる。）

（下の方より大勢をかき分けて、僧西照走り出づ。）

西照。西郷さん、西郷さん。

西郷。（俄に顏を陰らせる。）おゝ、西照さん。あんたまだ鹿兒島に居つたか。

西照。久振りであなたにも逢ひ、師匠の墓まゐりも濟ませて、はれ〴〵した心持で歸りかけると、だん〳〵穩かならぬ風說がきこえるので、途中から又引返して來ました。

西郷。むゝ、途中から引返して來られたか。

西照。（進みよる。）西郷さん。あなたはやつぱり負けましたな。

森田。なに、負けた。出陣にそんなこと云ふちやいかんぞ。

西郷。まあ、可い。西照さん、まつたくあんたの云ふ通りぢや。この間までは大丈夫、大丈夫と云うてゐたが……。西郷はやつぱり弱い男でごはしたよ。なんぼ心を強く持たうとしても、たうとう大きい渦の中にまき込まれてしまひました。月照さんと心中仕損うた西郷は、大勢の生徒をかゝへて二度の心中ぢや。併しまあ無事に東京までは行かれるでごはせう。安心してゐてください。

西照。（あやぶむやうに。）無事に東京まで……。東京まで……。いや、もう何事も申しますまい。

桐野。（急き立てるやうに。）西郷さん。行きませう。

西郷。おゝ、行く。（西照に。）では、あんたも御機嫌よう。

西照。あなたも御機嫌よろしう。

森田。（ふたりを隔てるやうに割つて入る。）さあ、行きませう。

桐野。行かう、行かう。（青竹をあげて一同を見かへる。）整列。

（兵士は形をあらためて銃を把り直す。雪又はげしく降る。）

森田。（兵士にむかひて。）お前等も知つて居るぢやらうが、これから肥後の國へむかふには、津奈

木太郎、佐敷太郎、赤松太郎、所謂三太郎峠の險阻がある。平日でも行軍は難儀であるところへ、まして此頃の大雪ぢや。その覺悟で行かにやならんぞ。

西郷。 薩摩の若い者がその位のこと恐れてどうなるか。（笑ふ。）われ〳〵はこれからアルプスを越えるんぢや。

桐野。 （おなじく笑ふ。）むゝ、アルプスぢや。

森田。 アルプスぢや。

西郷。 進軍。

（喇叭卒は喇叭を吹く。石村は旗を持ちて先に立ち、つゞいて桐野、森田、つゞいて西郷は勇吉の手をひき、そのあとに兵士が銃を擔ひてつゞき、最後に虎吉がゆく。石村が進む時、お弓は思はず二三歩すゝみ出るを、石村は見かへらずして進みゆく。西照、お幾、お弓、その他の人々は雪のなかに立ちてあとを見送る。）

第四幕

——幕——

熊本城外の村落。茅葺の農家を野戰病院にあてたるものにて、家には障子を閉め、まん中の入口は土間のこゝろにて、入口の柱には「薩軍野戰病院」と記したる長き木綿の旗を垂れたり。家の前、すこしく下の方によりたるところに櫻の大樹あり。更に下のかたには田畑をへだてゝ熊本城遠く見ゆ。

（四月初旬の午後、晴れたる日。家の前にはそこ此處に小銃を組みて立て、汚れたる赤毛布または薄緣などを地にしきて、輕傷の者はそこらに寢轉んでゐる體なり。飯原勝彌は右の足と左の手を白布にまきて、毛布の上にて英語の書物をよんでゐる。永山萬次は頭に繃帶して、櫻の下にて刀を磨いでゐる。武上一作は左の足をまきて、薄緣の上に仰向けに寢ころんでゐる。遠澤正安は半面に繃帶して、胡弓をひいてゐる。ときゞに小銃の音遠くきこゆ。）

永山。 （刀を磨ぐ手をやすめる。）また頻りに遣つちよるな。城の奴等もなか〳〵强情に遣るなう。

武上。 （起きてみる。）さうぢや。もう好加減に降參すればいゝに……。百姓鎭臺め。いくら强情に遣つたところで、もう食ふ物があるまいに、馬鹿な奴等ぢや。

永山。 こら、遠澤。そんなもん止さんか。碌々に彈けもせん癖に、さうぐしうてならん。もう止せ、止せ。

遠澤。　彈けるも彈けんもあるもんか。おれ生れてから斯んなもん初めて弄つて見たんぢや。妙なもんぢやなう。

武上。　お主、そんなもの何處から拾うて來た。

遠澤。　熊本の町で分捕りして來たんぢや。

永山。　惡いことするな。そんなこと知れたら隊長に叱らるゝぞ。第一、そんなもん我々の持つもんぢやない、盲か乞食の持つもんぢや。なう、飯原。

飯原。　（額をあげる。）なんでごはす。

永山。　あの遠澤のきい〳〵鳴らしちよるものは、乞食の持つもんぢやなう。

飯原。　はゝ、大方さうでごはせう。

遠澤。　わいどんまでが何云ふか。わいどんも鹿兒島に居つた時、尺八をひう〳〵吹いとつたぢやないか。

飯原。　尺八と胡弓とは違ひます。

遠澤。　なにが違ふか。おなじことぢや。

（上の方より相良治兵衞は洋服に高下駄をはき、朱鞘の大小をさし、左の手を繃帶して首にかけ、右の手に櫻の枝を持ちて出づ。）

相良。　どうぢや。いゝ日和ぢやなう。あまり天氣がいゝので、そこらをぶら〳〵歩きまはつて來たが、暖かい風がそよ〳〵と吹いて、畑には蝶が舞うてゐる。これで鐵砲の音がきこえんぢやつたら、迚も戰爭の最中とは思へんなう。飯原、この花を貴公に遣らうか。（櫻の枝を突き出す。）

飯原。　そんなもん要りません。

相良。　いらんか。若いに似合はん不風流の男ぢやなう。貴公は横文字の本さへ讀んで居りやいゝんぢや。どうぢや、英語は上手になつたか。

飯原。　英語ならあんたには負けん。

永山。　飯原めはリーダーの第三が讀めると云うて、えらい自慢ぢや。

飯原。　戰爭が濟んだら、先生に願うて洋行させて貰ふんぢや。

武上。　いや、えらさうなことを云ふな。このモンキーが……。

飯原。　なにがモンキーぢや。

武上。　外國ではお主のやうな男をモンキーと云ふんぢや。知つちよるか。はゝゝゝゝ。

飯原。（書物をなげ捨てる。）なんぢや。もう一度云うてみい。わかい者ぢやと思うて嘲弄し居るな。

相良。はゝ、よせ、よせ。洋行よりもおれは早う東京へ行きたい。二月の末から五十日もこゝに留められて居つちや何うも叶はん。もうあき〳〵してしまうたぞ。

（人々も鎭まりて顏を見あはせる。）

遠澤。（胡弓をやめて。）まつたくぢや。おれも早う東京へ行きたい。こんなところにぐづ〳〵して居つて何うなるのかなう。

永山。さうぢやなう。（刀をながめる。）おれのやうな者でも、この頃はなんだか寂しうなつて來た。

相良。貴公もさびしいか。おれも寂しい。どうも不思議ぢや。

（人々は云ひしれぬ寂しさをおぼえて、しばらく無言。小銃の音つゞけてきこゆ。家の障子をあけて星崎の娘お弓、白のうしろ鉢巻して、白の襷をかけ、看護婦のすがたにて出づ。）

お弓。鐵砲の音がまた烈しく聞えるやうでござりますな。

相良。城の奴等め、この四五日は急に強くなり居つて、むやみに逆襲して來居る。いま〳〵しい奴等ぢや。

お弓。田原坂や植木の方面はどうなつたのでござりませう。

相良。田原坂は疾うにいかん。いくら祕密にして居つても、おれはちやんと知つちよる。植木も木葉もみな敗られてしまうた。（嘆息する。）篠原さんも討たれてしまうた。

武上。そんな弱い音を吹いちやいかん。篠原さんが討たれても、桐野さんも居る、森田さんも居る、別府さんも居る。軍はこれからぢや。あせるにも及ばん、氣を落すにも及ばんよ。

お弓。それでも敵は軍艦で、川尻の方面へも廻つて來たと云ふではござりませんか。

永山。さうでごはす。川尻の方面でも戰ひがはじまつたと云ふ報告が來て居る。敵は前後から我我をはさみ擊にする作戰と見ゆる。なにしろ敵は兵數が多いのでなう。

相良。まつたくこつちは人數の少いのが殘念ぢや。それも熊本の城さへ落ちたら、九州の士族どもは皆あつまつて來るんぢやが……。（下のかたを見る。）あの城、早う落ちんかなう。

武上。今に落つる、きつと落つる。百姓鎭臺がいつまで戰へるもんぢやない。今しばらくの辛抱ぢやよ。

お弓。さうでござりませうか。（不安らしく考へてゐる。）

（小銃の音。下のかたより鮫島新七、足早に出づ。）

鮫島。今の戰ひで負傷者が大勢出來たので、すぐにこゝへ運んで來ます。何分たのみますぞ。

相良。　鮫島。今の戰ひはどつちの方ぢや。

鮫島。　段山の方で、敵の奴め烈しく逆襲して來居る。味方は苦戰で、もう百五六十人の死傷者が出來ました。

飯原。　百五六十人……。どうしてそんなに遣られたか。殘念ぢや。

永山。　殘念ぢや。

鮫島。　とてもこゝだけでは收容し切れんぢやらうから、ほかの病院へも通知して來るつもりぢや。

（お弓に。）では、賴みましたぞ。

（云ひすてゝ、鮫島は引返して去る。永山は刀をぬぐひて鞘に納める。家の障子をあけて、進藤お幾は木島の娘お夏、櫻井の妹お浪を連れ、いづれも看護婦の姿にて出づ。）

お幾。　今聞いてゐれば、負傷者が大分出來たさうでございますな。

お弓。　百五六十人も出來たといふことでございます。

お幾。　いづれこゝへ運んで來ませうが、兎もかくも其處まで行つて樣子を見て來ませう。あなたには留守をお賴み申します。

永山。　あまり前の方まで出て行くと、あぶなうごはすぞ。

お弓。　氣をつけて行つていらつしやい。

お夏。お浪。　では、行つてまゐります。

（お幾、お夏、お浪は急いで下の方へ走りゆく。お弓は不安らしく下の方をながめてゐる。）

遠澤。　一度に百五六十人も死傷者が出來るなどとは珍しいことぢやないか。

相良。　どうしたのかなう。敵の奴め死物狂ひで無茶に擊ち居るんぢやらう。

武上。　まあ、いゝわ。こつちが百五六十人も遣られるほどなら、敵の方では五六百人も遣られたぢやらう。差引きすれば、やつぱりこつちが勝ぢやよ。

飯原。　それもさうぢやが、どうも殘念でならん。けふは誰と誰とが遣られたかなう。

永山。　どうも寂しうていかん。今にこゝへ負傷者が來るぢやらう。元氣をつけて遣るために一つ歌はうぢやないか。

相良。　それもよからう。お弓さん、あんたも一緒に歌ふのでごはすぞ。さあ、歌へ、歌へ。

（人々は手拍子を取りて、「琉球へおぢやるなら草鞋穿いておぢやれ。琉球は石原、小石原。」と、口口に歌ふ。お弓も歌ふ。上のかたより森田金八郎が先に立ち、つゞいて西郷隆盛は陸軍大將の軍服をつけ、そのあとに從卒二人附添うて出づ。それを見て、人々は俄に形をあらためて敬禮す。）

森田。やあ、みな元氣がいゝな。この分では近いうちに再び戰鬪部隊に戻れるぢやらう。（西郷に。）御心配なさることはごはせん。負傷者もみな此通りの元氣でごはす。

西郷。（うなづく。）星崎の娘さん。こゝの病院には幾人ほどの負傷兵が收容してありますか。

お弓。はい。三十二人でござります。

西郷。この狹い家に三十二人、隨分窮屈ぢやらうな。（顏をしかめる。）よほど疵の重いのがごはすか。

お弓。五人ばかりは何うもむづかしさうでござります。

西郷。五人ばかりはむづかしい。（いよ〳〵顏をしかめる。）可哀さうぢやなう。森田さん。あんたや桐野は手輕う云うてをるが、方々の病院を見廻つたところでは、なか〳〵澤山の負傷者がごはすぞ。

相良。森田先生。川尻方面の戰況はどうでごはす。

森田。（紛らすやうに。）いや、なんとも確かにや判らん。

永山。敵は大軍ぢやさうでごはすな。

森田。戰爭は兵の多少にや因らん。遣るところまで遣つて見にや判るもんでない。お前等はそんなこと氣にせんで、早う癒つてくれにや困る。いゝかな。

一同。はあ。

（小銃の音。下のかたより鮫島新七は先に立ち、兵士は負傷兵六人を擔架、戸板、疊などに載せ、あるひは背に負ひて運んで來る。）

西郷。お〻、負傷者が又殖えたなう。（鮫島に。）こゝへ幾人運んで來るのか。

鮫島。方々の病院へ割當てたのでごはすが、こゝへも十五六人は收容して貰はにやなりません。

お弓。どんなに都合しましても、もう七八人以上は收容し切れません。どうかほかへお運びを願ひます。

鮫島。でも、どこも一杯でごはすから、無理にもこゝへ引取つてください。仕方がなければ、兎もかくも軒下にでも寢かして置いてください。

西郷。そりやいかん。負傷者をそこらへ捨てゝおく。そんな酷いことしちやならん。どうでも收容し切れんなら、わしの本營へ運んでゆけ。

鮫島。はあ。では、こゝへ八人だけ賴みます。

お弓。はい、はい。

（お弓は手傳ひて、負傷兵を家の内へ連れ込む。）

鮫島。　これで六人、あと二人はすぐに運んで來ます。

（鮫島と兵士等は西郷等に一禮して去る。）

西郷。　おびたゞしく遣られたなう。（森田に。）あんた方は總攻撃を遣つて、無理無體にあの城を攻め落せといふが、そんな無茶なことしたら、この上に幾百人の死人や負傷者が出來るか知れんぢやごはせんか。

森田。　しかし熊本の城を落してしまはんと、他國の者が動きませんからなう。篠原さんは初めから其意見でごはした。

西郷。　その篠原ももう居らん。（嘆息する。）これで西郷が居らんけりや、戰爭もすぐに鎭まるんぢやが……。

（人々はおどろいたやうに西郷の顏を見る。）

森田。　（困つたやうな顏をして。）西郷さん。もう行きませう。やがて會議のはじまる時間でごはすから。

西郷。　むゝ。

（人々は再び敬禮す。西郷と森田も擧手の禮をして下の方へ行きかゝる時、お夏とお浪が附添ひて、兵士は擔架にのせたるお幾を運び出づ。）

森田。　あゝ、進藤のお母さん、やられたか。

（兵士は擔架を家のまへに運び來る。西郷等も立戻る。相良、永山等もおどろいて擔架のそばに集まる。）

西郷。　進藤さん、どうして擊たれたのでごはす。

お夏。　負傷者があまり多いと聞きまして、三人連でその樣子を見にまゐりますと……。

西郷。　途中で流れ彈に中つたのでごはすな。

永山。　それぢやから危いと云つたんぢやが……。

お浪。　なにを云ふにも田圃中で、彈をよけるやうな所がなかつたのでござります。

西郷。　（お幾をあらためて。）まだ息があるやうでごはすな。進藤のお母さん、しつかりせにやいかんぞ。（呼び活ける。）そんな弱いことぢやいかんが……。これ、進藤のお母さん。どうぢや。

（家の内よりお弓出で、これを見て駈けよる。）

お弓。　あれ、まあ、どうしてこんなことに……。もし、進藤のお母さん、どうぞしつかりして下

さい。（お幾に取りすがりて叫ぶ。）

お幾。（かすかに眼をあく。）お弓さん。

お弓。はい、はい。なんでござります。

お幾。西郷先生に……宜しく云うてください。

西郷。（進みよる。）いや、西郷はこゝに居ります。（顔を出す。）それ、西郷でございますぞ。わかりますか。

お幾。おゝ、先生……。残念でございます。

西郷。残念……まつたく残念ぢや。兎もかくも奥へ行つて、早う手當をせにやいかん。お弓さん、介抱をたのみます。

お幾。いえ、いえ、もう迚も……迚もいけません。先生……。

西郷。むゝ、なんでごはすか。（耳をよせる。）

お幾。わたくしはこれで……これで役目を果たしました。どうぞ……どうぞ……悴をおたのみ申します。

西郷。判りました。判りました。あんたが頼まんでも、勇吉どんは西郷が屹と引受けました。御安心なさい、御安心なさい。

お幾。先生……先生。

（お幾は這ひ起きようと身を藻掻くを、西郷は兩手にてかゝへる。）

西郷。あ、動いちやいかん。動いちやいかん。ぢつとして……ぢつとして……。

（お幾は西郷の膝の上によりかゝりて息絶ゆ。お弓、お夏、お浪等は顔を掩うて泣く。他の人々も頭を垂れる。）

西郷。（死骸にむかひて。）進藤のお母さん。あんたはほんたうにお氣の毒ぢやつた。熊本の城さへ素直に落ちたら、女子の人達なんぞ斯んなところへ連れて來るんぢやなかつたが、城が容易に落ちんもんで、負傷者は毎日澤山できる。よんどころ無しに病院を作る。あんたばかりぢやない、こゝにゐる娘さん達が看護婦になつてわざ〳〵來てくれる。さうして、夜も碌々眠らんで働いて貰うて、しまひにはこんなことになつた。それもみな私が悪い、西郷の罪ぢや。堪忍してください。

（西郷は落涙す。お弓等は聲をあげて泣く。人々も鼻をつまらせる。小銃の音また聞ゆ。西郷はうつむいたまゝで暫らく默してゐる。）

森田。（進みよりて西郷の肩をたゝく。）西郷さん。會議の時間がおくれます。死骸の始末はこゝに居る者にたのんで、早う行きませう。

西郷。（しづかに死骸を横へて起つ。）始末すると云うて、すぐに埋めちやいかん。勇吉どんにお母さんの死顔を一目見せてやりたい。勇吉どん、どこへ行つたか。

森田。戰鬪部隊に加はつて段山の方面へ出かけたかも知れません。

西郷。そりやいかん。わしのそばを離れるなと云うて置くに、いつの間に出て行つたか。

森田。若い者のことぢやで、人の鬪ふのが羨ましうてならんのでごはせうよ。

西郷。いや、落着いて居つちやいかん。（擔架の兵士にむかひて。）おまへ達はこの死骸を兎もかくも家のなかへ運び込んで置いて、すぐに段山へかけ付けて進藤勇吉を呼び戻して來い。怪我でもしたら何うもならん。いや、そんなことをして居つたら遲うなる。（從卒を見かへる。）おまへ達、早う行つて勇吉どん呼び戻して來い。なんと頑張つても構はん。無理に引摺つて來るんぢやぞ。早う行け、早うゆけ。

從卒。はあ。

（從卒二人は早々に下の方へ走りゆく。西郷は不安らしく見送る。）

西郷。勇吉どんなぜ行つたか。怪我でもせんけりや可いがなう。

（森田はその死骸を奥へ持つてゆけとお弓に眼で知らせる。お弓は心得て、擔架の兵士と共にお幾の死骸を家の内へ運びゆく。お夏もお浪も附いてゆく。上のかたより桐野利秋は片手に地圖を持ち、片手に竹の杖を持ちて出づ。あとより從卒二人附添うて出づ。）

桐野。西郷さん。こゝにおいでゝごはしたか。

西郷。なにか報告でも來ましたか。

桐野。むゝ。（云ひつゝ相良等を見かへる。）お前等負傷して居るのに、いつまで表に出てをるか。日が暮れかゝつて、風がだん〳〵に寒うなつて來たぞ。

一同。はあ。

桐野。内へ這入れ、内へ這入れ。

一同。はあ。

（相良、永山、武上、遠澤、飯原の五人は會釋して、家の内に入る。それと引違ひに、擔架の兵士二人は内より出で來り、一禮して去る。）

桐野。病院のなかに椅子が二三脚あるぢやらう。こゝへ持出して來い。

従卒。はあ。

（従卒二人は家のなかより三脚の椅子を持ち來りて、よきところに据ゑる。西郷は櫻の下に立ちて城の方をながめてゐる。）

桐野。（従卒に。）わしが呼ぶまであつちへ行つてをれ。

従卒。はあ。（會釋して上の方に去る。）

桐野。西郷さん。こゝへかけたら何うでごはす。

（西郷はしづかに引返して來て、森田がすゝむるまゝに眞中の椅子に腰をかける。桐野と森田も椅子にかける。）

桐野。（左右を鳥渡見かへりて。）植木方面の報告によると、前線はみな敗れました。

森田。總退却でごはすか。（殘念さうに嘆息する。）士氣が挫けるといかんと思うて、まだ發表はせんけれど、川尻方面も續々退却ぢや。うしろが敗れ、前が敗れ、腹背に敵をうけて何うしますかな。

桐野。敵の援兵と熊本城と已に聯絡が通じたらしいから、油斷はならん。川尻方面が敗れて、敵が續々進軍して來るとあれば、うしろを斷たれんうちに引揚ぐるが萬全の策でごはせう。

西郷。（嘆息する。）熊本の敵も案外に強かつたなう。

森田。町人や百姓の鎭臺兵なんぞ一氣に蹴散してしまふ積りぢやつたが、遣つて見るとなかなか手剛い。われ〳〵士族を相手にして、五十日も持堪へるとは實に案外でごはした。

桐野。この城が早う落ちてくれたら、九州全體はこつちのものになつたんぢやが……。殘念ながらもう遲い。

森田。（かんがへて。）いや遲うないかも知れません。敵の援兵と熊本城と聯絡が附いたか何うか、まだ確かには判らんのでごはすから、最後の手段として、城内へ降參をすゝめに遣つてみますか。

桐野。むゝ。（考へる。）貴公の發意で、これまでにもたび〳〵矢文など送つてみたが、一向に手堪へが無かつたぢやないか。

西郷。（しづかに。）そんなこと既う遲い。無駄なことぢや。

森田。仕損じたところで元々ぢやごはせんか。城内ではもう確かに糧食が竭きてをる筈でごはす。そこに附け込んで降參をすゝめに遣つたら、案外に成功するかも知れませんぞ。

桐野。なるほど、遣つて見るもよからう。して、その使に誰を遣るか。

森田。石村はどうでごはせう。この際、鹿兒島の者を遣つちや敵の感情が面白うないぢやらうと思はれます。石村は東京の者で、なか〳〵利口な奴でごはすから、この使には適任ぢやらうかと思ひますが……。

桐野。むゝ。

森田。それからもう一人……。（起つて家の入口より呼ぶ）星崎の娘さん、お弓さん。

お弓。はい、はい。

（お弓は奥より出づ。）

お弓。なんぞ御用でござりますか。

森田。お弓さん。あんたに頼みたいことがごはす。

お弓。はい。

森田。あんたの兄貴の資正どん、まだ無事で居るぢやらうか。

お弓。（愁はしげに。）どうでござりませうか。一向に存じません。

森田。（うなづく。）そりや判らん筈ぢや。わしにも判らん。しかし萬一資正どんが戰死したとしても、城のなかには資正どんの友達も居る。あんたの識つてをる鹿兒島の者も澤山居る。そこへ使に行つて貰ひたい。

お弓。え。

森田。わたしが今手紙を書く。それをとゞけて貰ひたい。つまりは敵に降參をすゝめに行くんぢや。

（お弓はかんがへてゐる。）

森田。忌でごはすか。あんた一人で行くんぢやない。あの石村も一緒に遣ります。白い旗さへ立てゝ行けば、敵の方でも何うもしやせん。そりや大丈夫ぢや。どうでごはすな。

お弓。（かんがへて。）石村さんもいらつしやるのでござりますか。

森田。むゝ。まさかに女子ひとりを遣る譯にや行かん。石村も一緒に遣ります。

西郷。（しづかに口をひらく。）いや、いかん。石村を遣ることはいかん。

森田。なぜでごはすか。

西郷。石村は今度のことに反對で、わしにも頻りに意見し居つた。それでもわしと生死を供にすると云うて一緒に附いてきた男ぢや。勿論、味方に裏切するやうな人間ぢやないが、土臺この軍に反對の意見を懷いてをる男を、かういふ使に遣るのはいかん。

桐野。 なるほどそれは面白うない。では、石村を止めにして、ほかに誰をやりますかな。

西郷。 誰も遣るにや及ばん。お弓さん、あんたも行かんで可い。敵ではあるが、資正どんも薩摩の男ぢや。あんたが降参をすゝめに行つたら、きつと叱つて追ひ返すにきまつてをる。行くにや及ばん。止めなさい、止めなさい。

森田。 （少しく不平らしく。）止めますか。

西郷。 （頭をふる。）今更そんな小刀細工する時節ぢやごはせん。お弓さん、あんたはあつちへ行つて、負傷者の看護をたのみます。

お弓。 はい。

西郷。 桐野さん、森田さん。あとのことは本營で相談するから、あんた等は一足先へ行つてくれんか。わしは進藤のお母さんの死骸をもう一度拜んでゆく。勇吉どん、どうしたかなあ。

（西郷は椅子を起つ。）

桐野。 （おなじく起つ。）西郷さん、西郷さん。

（西郷は聽かざるやうに内に内る。お弓も入る。森田は苛々したやうに起ち上り、そこらを徘徊す。小銃の音きこゆ。桐野は再び椅子に腰をおろして腕をくみゐたるが、やがて森田に聲をかける。）

桐野。 森田さん。

（森田は答へず。）

桐野。 （再び呼ぶ。）森田さん。金八どん。

森田。 （見かへる。）なんでごはすな。

（桐野は眼でまれく。森田はすゝみ寄る。）

桐野。 （すこし聲を低める。）どうもおやぢにも困るぢやごはせんか。

森田。 （うなづく。）なぜあんなに弱くなつたんでごはせう。今度のことも初めは氣が進まんやうぢやつたが、たうとう思ひ切つて起つことになつて、鹿兒島を出る時はえらい元氣が好かつたが、この頃はどうもいかん。

桐野。 （嘆息返しに。）どうもいかん。どうしてあんなに弱くなつたんぢやらう。

森田。 味方の形勢が惡いせるでごはせうか。

桐野。 いや、そんなことで弱るおやぢぢやない。もつと深い譯がある。

森田。 なんでごはせう。

桐野。 それがよく判らん。おやぢが弱つたら味方がみな弱つてしまふ。なんでもおやぢを勵まし

て、味方の勇氣を付けにやいかん。

森田。（苛々する。）しかし萬事が斯う食ひ違うちや何うもならん。

桐野。いや、貴公までがそんなに燥つちやいかん。ほんたうの仕事はこれからぢや。

森田。殘念ぢやが、わしはもう味方の運命が見え透いたやう氣がしてならん。

桐野。（起つて森田の肩をたゝく。）しつかりしてくれ。おやぢは無暗に沈んでしまふ。貴公はむやみに苛々する。それぢや何うにもならんぢやないか。

森田。どうにもならんかも知れん。（そこにある椅子を突き倒す。）

（桐野は困つた顏をしてながめてゐる。上の方より桐野の從卒一人出づ。）

從卒。前線から再び報告の使がまゐりました。

桐野。よし、今行く。

（桐野は森田を頤にてまねき、從卒と共に上のかたに去る。森田も足早につゞいて去る。下の方より石村賢次郎が先に立ち、負傷兵二人を兵士に負はせて出づ。）

石村。（家の外から聲をかける。）負傷兵をねがひます。

（家の内よりお夏とお浪出づ。）

石村。ふたり連れて來ました。どうぞ願ひます。

二人。はい、はい。

（お夏とお浪は手傳ひて、兵士と共に負傷兵を奥へつれ込む。小銃の音つゞけて聞ゆ。石村はそこにある椅子に腰をかけて、新しい草鞋と穿きかへてゐる。負傷兵を負ひ來りし兵士二人は再び出で來り、足早に下のかたに立去る。家の内よりお弓出で來りて窺ふ。）

お弓。（小聲で。）石村さん。

石村。（見かへる。）おゝ、お弓さんでしたか。毎日御苦勞です。

お弓。一向お役に立ちません。

（石村は椅子に腰をかけてゐる。お弓はその傍に寄りて立つ。）

お弓。森田さんの御命令で、わたくしは城内へお使に遣られるところでございました。

石村。城内へ……。なにしに行くのですか。

お弓。降參をすゝめるお使に行くのでしたが、それはお見あはせになりました。初めには石村さん、あなたと御一緒にまゐる筈でございました。

石村。わたしと一緒に……。

お弓。はい。（あたりを見まはす。）さうしましたら、あなたにお願ひ申して、どこかへ連れて行つて頂かうかと思つて居りました。

石村。城へは行かずに……。どこへ行くつもりです。

お弓。どこでも宜しうございます。戰爭のないところへ……。わたくしはもう戰爭には倦き果てました。

石村。あなたは女だから、さうかも知れません。もう五十日になりますから。

お弓。この後にもそんな機會がありましたら、あなたは一緒に連れて行つて下さりますか。

石村。（形をあらためて起つ。）そんなことは出來ません。わたしは最後まで先生のおそばに附いてゐなければなりません。

お弓。でも、あなたは今度のいくさに反對であつたと云ふではございませんか。

石村。反對でも贊成でもそんなことはもう問題ではありません。先生が一旦決心して起たれた以上、わたしは先生と運命を倶にする覺悟です。戰爭に倦きたらば、あなた一人で鹿兒島へ歸つたらいゝでせう。

お弓。戰爭の濟まないうちに一人で歸るわけにはまゐりません。（下の方を指さす。）あの城の中には兄もゐるのでございますが、そこへ行くことも出來ません。兄は一體無事でゐるのか何うか、それすらも判りません。

石村。（同情するやうに。）お察し申します。

お弓。おなじ死ぬにしましても、兄は官軍でございます。わたくしが若し死にますれば、賊軍の一人でございます。さつきも進藤のお母さんの死骸を見て、つくづく考へました。

石村。いや、それは間違ひです。（少しく激して。）先生は……西鄕先生は決して賊でも謀叛人でもありません。世間でなんと云はうとも、先生の心持はわたしがよく知つてゐます。

お弓。それでも世間ではみんな賊軍と云つてゐるではございませんか。

石村。それが如何にも殘念ですから、わたしは初めに反對したのですが、もう仕方がありません。しかし先生が賊でないことは今でも堅く信じてゐます。

（家の内より西鄕出づ。二人はハつとおどろき、石村はあわてゝ敬禮する。）

西鄕。石村。今聞いてゐれば、西鄕は賊でないとか云うて居つたな。

石村。はい。

西鄕。賊であるとか賊でないとか、議論さるゝだけでも私は苦しい。堪らなく苦しい。西鄕は朝

廷に對して毛頭も不忠をかんがへてをる男ぢやない。それでも私のしてをる事は、表面から見れば確かに賊ぢや、あつぱれの謀叛人ぢや。わしも初めからそれを知らんぢやなかつたが、大勢の人間の力に搖り出されて、たうとうこゝまで進んで來てしまうた。

石村。 それはわたくしもよく存じてをります。

西郷。 それも故障無しに安々と東京まで乘り込めたら、わしが謀叛人でないといふ證據も立派に見せらるゝと思うてゐたが、萬事がかう食ひ違うてしまうては、所詮官軍と賊軍との戰ひぢや。（悶えるやうに。）西郷は賊軍の大將ぢや。西照さんに云はれた通り、やつぱり私は弱かつた。誰がなんと云はうとも、わしが鹿兒島にぢつと腰を据ゑて居つたら、一萬三千人の若い者はひとりでも動き出すのぢやなかつたものを……。あゝ。

（西郷はよろめきながら椅子に腰を落す。石村は不安らしく進みよる。）

石村。 先生、先生。

（お弓もおど〳〵しながら立寄りて窺ふ。西郷は額を押へてゐる。下のかたより西郷の從卒一人出づ。）

從卒。 段山の方面を探しましたが、進藤勇吉は見えません。

西郷。 （俄にふり向く。）なに、見えん。

從卒。 はあ。どこにも見えません。

石村。 進藤勇吉君は負傷しました。

西郷。 勇吉どん負傷した……。おまへはそれを知つて居るのか。

石村。 わたくしは確かに知つてをります。勇吉君は敵にやられたのではございません。味方の火藥が偶然破裂して、勇吉君は面部に負傷したのでございます。

西郷。 （氣づかはしげに。）して、命には別條なかつたか。

石村。 生命には別條ありませんが、おそらく兩眼は失明するだらうと云ふことでございます。

西郷。 （悲痛の色。）勇吉どん盲になるか。あゝ、酷いことをした。何故うか〳〵と戰線へ出たかなう。

お弓。 どうしても療治は出來ないのでございませうか。

石村。 どうもむづかしさうに思はれます。お母さんに見せるのは氣の毒だと云つて、ほかの病院へ送りました。

お弓。 そのお母さんも……。（泣く。）

石村。　え。勇吉君のお母さんもどうかしましたか。

西郷。　お母さんもあすこに死んでをる。（奥を指さす。）

石村。　え。

西郷。　石村。勇吉どんの病院を知つてをるぢやらう。すぐに案内してくれ。どんな樣子か見とゞけて來にやならん。

石村。　はあ。

（石村は先に立ち、西郷は忙はしく其のあとに附いてゆく。從卒も附いてゆき、三人は下のかたに去る。お弓は寂しげに空を仰ぎ、やがてそこらの椅子をしづかに片附ける。春の日は暮れかゝりて、折々に小銃の音。上のかたより僧西照出で、お弓に默禮して行きかゝる。）

お弓。　（呼びとめる。）あ、もし、あなた。

西照。　（立ちどまる。）はい。

お弓。　あの、こゝにも戰死者があるのでござりますが……。

西照。　ほう、戰死者が……。早速御回向いたしませう。（行きかけて立停まる。）併しこゝにはほかにも大勢の病人や怪我人がゐるのではござりませんか。

お弓。　はい。ほかにも四十人ばかり、その中にはむづかしいのも五六人居ります。

西照。　その人達の枕もとで御回向するのも如何。いづれ御埋葬の節にあらためて御回向いたすとして、唯今はこゝでよそながら拜んで置きませう。

お弓。　どうぞ宜しく願ひます。

西照。　して、それは何といふお方でござります。

お弓。　進藤さんのお母さんでござります。

西照。　おゝ、あのお方が……。それは、それは、お氣の毒でござりました。

（西照は口のうちにて經文を誦しながら、家の方にむかひて回向す。お弓もひざまづきて合掌す。小銃の音ををり〳〵にきこゆ。）

――幕――

第五幕

（一）

熊本二本木の豪商の家を薩軍の本營にあてたる體。數寄を凝したる二重屋體の座敷。正面の上のかたに立派なる床の間、違ひ棚、つゞいて壁。その壁には軍帽、軍刀などをかけてあり。軍用行李、雜囊のたぐひもそこらに雜然と積まれてあり。下の方は廻り緣にて奥につゞく。庭には石燈籠、飛び石。木蓮の花白く咲けり。庭には薦ゞつみにしたる軍需品の箱などが澤山置かれたり。すべて豪奢なる家を軍陣にあてゝ踏み荒らしたる體と知るべし。

（雨倉彌太郎と有馬銀之助は庭の薦づつみに腰をかけ、雨倉は刀豆の烟管で莨を喫つてゐる。すこし離れて、西郷の僕虎吉は荷作りをしてゐる。四月十四日の朝。小銃の音をり〳〵にきこゆ。）

雨倉。どうも草臥れたぞ。ちつと休まう。

有馬。でも、今のうちに荷作りをしてしまはんと、叱らるゝでごはせう。

雨倉。いくら叱られても、すこしは休息さして貰はにや堪らん。ゆうべは碌々眠らんぢやつたからなう。

有馬。それを云へば、わしも眠い。どうしても退却ぢやらうか。

雨倉。どうもさうらしい。殘念ぢやなう。忌々しい土百姓め、たうとう我々を追ひまくり居つた。

虎吉。（忌々しさうに。）士族士族と威張つても、町人や土百姓の徵兵に意氣地もなく追ひまくられてしまふのだ。

雨倉。そりや仕方がない。軍の勝負は時の運ぢやからなう。強い者が屹と勝つとは決らんよ。

虎吉。まだそんなことを云つてゐる。負惜みも好加減にさつしやい。大勢が寄つて集つて旦那樣をかつぎあげて、こんな騷ぎを仕出來してしまつて、舉句の果がこの城一つ攻め落すことが出來ないで、尻尾をまいて引きあげるとはあんまり意氣地が無さすぎて馬鹿々々しい。おまへさん達も士族の性根玉があるなら、旦那さまへの申譯に、みんな揃つて腹でも切らつしやい。

雨倉。まあ、さうやかましく云ふなよ。我々も今に勝つて見せるから。

虎吉。旦那樣一人がいくら偉くつても、みんなが弱くつて勝てるものか。悠々と莨なんぞ喫んで

ゐないで、早く働かつしやい。

（奥より縁づたひにて、この家の女中が襷がけにて、大きい土瓶をさげ、盆に茶碗を乗せて持つて出づ。）

女中。お茶をおあがり下さい。

二人。や、ありがたう。

（女中は引返して去る。）

有馬。おい、ぢいやも茶を飲まんか。

虎吉。こつちは大急ぎだ。茶なぞ飲んでゐられるものか。

（虎吉はしきりに荷作りをしてゐる。雨倉と有馬は茶をのんでゐる。やはり縁傳ひにて森田金八郎出づ。）

森田。どうぢや。大抵片附いたかな。

雨倉。もう大抵は片附きました。

森田。疲れたぢやらう。まあ、休め。

虎吉。（見かへる。）なに、さつきから休んでばかりゐますよ。ちつと叱つて働かせて遣つて下さい。

森田。味方の形勢が面白うないので、人夫どもがだん〳〵に散つてしまうて、何かにつけて不便でならん。ぢいやも忙しからう。

虎吉。かうなれば忙しいのが當りまへでございますよ。

（森田は帯剣を外して縁にあぐらをかく。）

森田。雨倉。一服貸してくれんか。

雨倉。はあ。（烟管と莨入れを出す。）火がごはすか。

森田。むゝ、ある。（そこにある莨盆をひき寄せて莨を喫ひはじめる。）

虎吉。（横目で睨む。）あゝ、そこでも莨休みか。

森田。（笑ふ。）かういふ時に一服飲むのが旨いんぢや。

虎吉。では、いつそ浴びるほど、酒でも飲んではどうでございますね。

森田。まつたく此頃は浴びるほど飲みたいと思ふが、陣中で酒を飲むのは禁制ぢやからなう。

（小銃の音つゞけてきこゆ。人々は耳をそばだてる。）

雨倉。敵の奴め、しきりに逆襲をやるな。

虎吉。こつちが弱ければ、向ふが強くなるのだ。

森田。（癇癪を起す。）やかましい。もう饒舌るな。

（下の方より飯原勝彌出づ。負傷は大抵癒えたる體にて、左の手だけに白布をまいてゐる。）

飯原。先生。

森田。なんぢや。

飯原。又あの坊主がまゐりました。西郷先生に逢ひたいと云うて……。

森田。（舌打する。）あの坊主、また來たか。

（雨倉と有馬は顏を見あはせる。）

飯原。斷りますか。

森田。むゝ、斷れ。あの坊主、どうもいかん。あいつが來ると、西郷さん妙に沈んでしまふ。あんな奴にたび〳〵逢はせては好うない。追ひ返してしまへ。

飯原。はあ。（引返して去る。）

虎吉。あの西照さんといふ人は、鹿兒島からわざ〳〵こゝまで追つて來て、討死した人達の囘向をして遣らうといふ、まことに奇特な御出家樣だ。なぜあの人をみんなが嫌ふのかなあ。

雨倉。いや、あの坊主、まつたく忌な奴ぢや、西郷先生ばかりぢやない。われ〳〵もあいつの姿をみると、なんだか薄暗いやうな心持になつてならん。

有馬。あいつ敵方の廻し者ぢやごはすまいか。

森田。いや、さうぢやない。西郷さんの古い友達ぢやさうなが、あいつが來ると何うもいかん。西郷さんが不思議に弱くなる。

雨倉。魔法使ひでもごはすまい。

森田。はゝ、馬鹿な。しかしあんな奴は西郷さんに逢はせんに限るんぢや。

（奥より緣傳ひにて、西郷は軍服をつけて出づ。）

西郷。今朝は好う眠つてしまうた。もう何時ぢやらうか……。ゆうべはどうも眠られんで、曉方からやう〳〵寢付いたもんぢやから、えらい朝寢をしてしまうた。

一同。お早うございます。

西郷。森田さん。あんたは喫うちよるな。一本あげようか。（衣兜より葉卷を探り出す。）長崎から來たんぢやさうな。

森田。ありがたうごはす。（莫をうけ取る。）では、これを雨倉に戻すぞ。（烟管と莫入れを雨倉に戻す。）

西郷。お前等にも分配せうか。（衣兜より又もや葉卷二三本をつかみ出して雨倉と有馬にやる。）

二人。ありがたうごはす。
西郷。虎吉は莨は嫌ひぢやつたな。
虎吉。大嫌ひでございます。
雨倉。先生。
二人。早速頂戴します。
（二人はすぐに巻莨を喫ふ。西郷は更に衣兜より刀豆の烟管と莨入れを出して、莨を喫ふ。）
西郷。（笑ふ。）わしには此の方がうまい。
（下の方より飯原出づ。）
飯原。たうとう追ひ返してしまひました。
森田。よい、よい。
西郷。誰を追ひ返したのか、
飯原。え。（躊躇する。）
西郷。（笑ふ。）隠さんでも可いぢやないか。
飯原。はあ。

虎吉。なに、あの西照さんがたづねて來たのでございます。
西郷。おゝ、西照さんが來たのか。（俄に顔を曇らせる。）さうして、斷つたら何と云うて歸つた。
飯原。西郷さんが斷るんぢやあるまい。あんた方が斷るんぢやらうと云うて、そのまゝ素直に立去りました。
西郷。さうか。（うなづく。）わしも初めは懐しいと思うたが、どうも此頃はあの人に逢ひたうないやうな氣がする。鹿兒島からこゝまで我々のあとを追うて來て、戰死者の回向をして遣らうといふ。まことに深切ぢや、奇特ぢやと思うて、なにぶん頼みますと云うては置いたが、どうも此頃はあの西照さんの顔を見るのが怖ろしいやうでならん。
森田。あんな痩坊主、なぜ怖ろしうごはすか。
西郷。それが何うもいかん。あんたには過日話したこともごはしたが、西照さんの師匠は京の清水の月照と云うて、なか〳〵偉い勤王家でごはした。それで此頃あの西照さんの顔を見てゐると、それが何うも師匠の月照さんのやうに見えてならん。
（人々は息をのんで聽く。）
西郷。くどくも云ふやうぢやが、月照さんは偉い勤王家ぢやつた。その月照さんがぢつと眼を据

ゐて、この西郷を睨んでをる。この謀叛人の西郷を睨んで居る。（眉を皺める。）わしはどうも怖ろしうてならん。わしはおのづと頭が下つて、この胸が石のやうに重くなる。わしはもうあの人に逢ひたうない。あの人はどうでもないが、あの人に附いてをる月照さんの影が怖ろしい。（ほつと息をつく。）よう斷つて歸してくれた。

森田。　では、もういつそあの坊主を陣中から追拂つてしまふが好うごはせう。戰死者の回向なぞは、あの坊主に限つたことぢやごはせん。あんたばかりぢやない、こゝらにをる若い者もみなあの坊主を嫌うて居ります。

西郷。　追ひ拂ふと云うても立退かんかも知れん。

森田。　立退かんと云うたら、腕づくで追ひ拂うてしまひますわ。

西郷。　そんな亂暴なことしちや困る。西照さんはわしの古い友達ぢやから。（考へる。）まあ、そのまゝにして置いてくれ。

森田。　では、あんな坊主のことなぞ何にも思はんがようごはす。

西郷。　さうぢや。わしもさう思うてをる。こんなことぢやいかんな。

（西郷は再び莫を喫ひはじめる。虎吉は荷作りをしまつて汗を拭く。）

虎吉。　やれ、やれ、これで先づこつちは片附いた。（雨倉等に。）莫休みも好加減にして、そつちは何うですな。

有馬。　むゝ、もう少しぢや。遣つてしまはうか。

飯原。　おれも手傳はう。

（雨倉、有馬、飯原の三人は再び荷作りにかゝる。）

虎吉。　この荷物はすぐに表へ運ばせますか。

森田。　どうなるか判らん。まあ、もう少しさうして置け。

虎吉。　はい。では、わたくしも表へ行つて少し休んでまゐりませう。御免ください。

（虎吉は一禮して、汗をふきながら下の方に立去る。）

雨倉。　（笑ふ。）この頃はぢいやに叱られ通しぢや。

有馬。　士族の癖に土百姓に負けたと云うて、今もさんぐに叱られた。

飯原。　あのぢいやに逢うては迚もかなはんよ。

（下の方より石村賢次郎出づ。）

石村。　先生に申上げます。

西郷。なんぢや。なにか新しい報告でも來たか。

石村。いや、さうではございません。相良治兵衛が軍律を破りました。

西郷。なにを仕出來したか。

石村。相良は負傷も大抵平癒したので、毎日そこらをぶら〳〵散歩して居りました。今朝も早朝から近所の田圃路をあるいてをりますと、鷄を一羽さげて來る百姓に行き逢ひましたので、相良はその鷄をおれに呉れんかと云ひますと、その百姓は劍もほろゝな挨拶で、軍なんぞをして其處らを暴しまはるやうな奴等には、菜つ葉ひとつでも遣られないとか云つたさうでございます。

西郷。むゝ。

石村。そこで、相良はむつとして、おのれ無禮な奴めと、いきなり拔擊に斬つてしまつたのでございます。勿論、百姓の方にも罪はあるのでございますが、妄りに人民を殺傷したり、みだりに人民の物を掠奪したりすることは、軍律できびしく禁じられて居ります。併し相良は普通の兵でなく、小隊長格の者でございますから、一應その御裁判を仰ぎに出ました。

森田。あれほど申渡して置くに怪しからん奴ぢや。軍律違犯のものは割腹ときまつて居る。われに相談するまでもない、すぐに詰腹を切らせろ。

西郷。相良は正直者ぢやに、なぜそんなことをしたかなう。おそらく冗談が高じたのぢやらうが、人間ひとりを殺しては濟まん。それで本人はどうして居る。

石村。軍律を犯したのは自分が惡い。西郷先生の前へ出て一應の申譯をした上で、どんな處刑にも服すると神妙に申してをりますので、一緒に連れてまゐりました。就きましては、わたくしからのお願ひでございますが、唯今は一人の兵卒でも大切の場合でございます。相良も負傷がおひ〳〵全快して、近いうちには再び戰鬪部隊に加はることの出來る身の上でございますから、此際なんとか寛大の御處置をねがひたいと存じて居りますが、如何でございませう。

西郷。（考へて。）兎もかくも相良をこゝへ呼べ。

石村。はあ。（引返して去る。）

雨倉。石村の申す通り、相良は決して惡い奴ぢやごはせん。

飯原。ほんの出來心で遣つたことでごはせうから、どうか御勘辨をねがひます。

有馬。わたくしからもお願ひ申します。

日本映畫學校圖書
綺堂戲曲集

森田。なるほどこの場合、殺すのも可哀さうかも知れん。小隊長を罷めさするぐらゐのことで、今度だけは特別に免して遣りますかなう。

西郷。先づ一應訊問してからのことぢや。

（下の方より石村は相良治兵衛を連れて出づ。相良は矢はり左の手を白布にむすびて頸にかけてゐる。）

石村。相良を連れてまゐりました。

西郷。相良。おまへはなぜ無暗に人を斬つたか。敵でも無暗に斬つちやならんと云ひ渡してある。まして何の關係もない百姓なぞをなぜ無暗に殺したか。

相良。（平然として。）憎い奴ぢやで殺しました。

西郷。なぜ憎い。鶏を呉れんと云ふたのがそれほど憎かつたか。

相良。鶏なぞどうでも好うごはす。それは唯冗談半分に云うたのでごはす。呉れんからと云うて無暗に殺す筈はごはせん。けれども、あの百姓め。（涙をほろ〳〵と流す。）西郷先生のことを疫病神ぢやと云ひ居りました。西郷の奴めが飛んでもないことを始めたので、家は焼かれる、田畑は荒される、大勢の人間がどれほど難儀してをるか知れん。あんな疫病神は早く亡びてしまへと云ひ居りました。わたくし共はなんと云はれても勘辨しますが、西郷先生を疫病神――。（興奮して。）わたくしは何うでも勘辨が出來んのでごはす。

22993

西郷。それで斬つたか。

相良。（いよ〳〵興奮して。）斬りました。すぐに斬つてしまひました。あんな奴は斬つても殺しても、決して惡いとは思ひません。わたくしは今でも後悔して居りません。ほかにもあんな奴があれば、五人でも十人でも片端からみな斬つてしまひます。

西郷。（叱るやうに。）馬鹿云ふちやいかん。お前ばかりぢやない、ほかの者にもよく云ひ聞かして置く。たとひどんな事情があらうとも、人の家を焼き、田畑を荒したのは我々の罪ぢや。疫病神と云はうとも、貧乏神と云はうとも、かならず腹を立つちやならん。よいか。

相良。でも、先生のことを……。

西郷。おまへ達でも私でも同じことぢや。（嘆息するやうに。）疫病神はおろか、謀叛人とさへ云はれて居るぢやないか。

（人々は頭を垂れてゐる。）

西郷。本來ならばお前は軍律の通りに處分せにやならんのぢやが、みなの者も命乞ひをする。森

日本映畫學校圖書

田さんも小隊長を罷めるぐらゐで免してやれといふから、けふはこれで免すことにする病院を出たらば元の通りに働かにやいかんぞ。

相良。　はあ。

一同。　（森田を除いて。）ありがたうごはす。

石村。　大先生、森田先生。わたくしからもお禮を申します。

（相良は人々に一禮して下のかたに立去る。進軍の喇叭の聲、小銃の音はげしくきこゆ。）

石村。　また戰鬪が激しくなつたと見えますな。

森田。　敵の奴め、ます〳〵逆襲し居るな。鳥渡行つて見て來ませう。

（森田は劍をさげて奥に入る。）

雨倉。　われ〳〵も行つて見て來ようか。

飯原。　見て來よう、見て來よう。

有馬。　（雨倉、飯原、有馬の三人も下の方へ走りゆく。小銃の音つゞけて聞ゆ。）

石村。　（不安らしく。）先生。いよ〳〵退却でございませうか。

西郷。　田原坂、植木、木葉、高瀬、どの方面もみな敗られて、敵の援軍が確實に熊本城と聯絡を通じた以上は、われ〳〵ももう思ひ切つて、この城の圍みを解くより外はあるまい。それでゆうべから俄に退却の準備に取りかゝつてをるんぢやが、かうなつては將來の見込みも立たん。熊本城を取るか取らんかが我々の運定めで、篠原や森田は總攻撃で攻め落せと最初から頻りに勸めたが、なにぶんにも澤山の人數を損じるのを恐れて、わしは反對したのぢやつたが、今となつて考へると、やつぱり思ひ切つて遣つた方がよかつたかなう。負けても大勢の人を殺す程なら、勝つて大勢の人を殺した方が、まだしも優であつたかも知れん。

石村。　また一方には熊本を圍みながら、早船を出して長崎を占領し、そこを根據地として直ちに大阪を衝くといふ計畫もございましたが、それも中止になつてしまひました。

西郷。　さうぢや。勝ちさへすればよいと云ふのなら、まだ外にも色々の方法がないでもなかつたが、それではまことの謀叛になる。われ〳〵は戰ふのが本來の目的ぢやない、たゞ東京まで眞直にゆき着けばよいのぢやで、どこまでも平押しに押して行かうとしたのは、無策といへば無策、正直といへば正直ぢや。くどくも云ふやうぢやが、この熊本が手に入らんで空しく退却するやうでは、われ〳〵の運命ももう見え透いてをる。我々は何のために起つたのか判らんことになつてしまうた。さつきの百姓がいうた通り、西郷はいたづらに世を

騒がした疫病神になつてしまうた。

石村。　まことに殘念でなりません。

西郷。　や、今の疫病神で思ひ出した。あの相良はどうしたか。彼奴、腹でも切りやせんか。

石村。　しかし免されたのでございますから。

西郷。　いや、なんとも云へん。無事に病院に歸つたか何うか、見とゞけて來てくれ。

石村。　かしこまりました。

（石村は早々に下の方に去る。小銃の音ますゝ激しくなる。西郷は起つて緣先に出る。下のかたよりお弓走り出づ。）

お弓。　敵の彈が病院の方へ頻りに飛んでまゐりますが、如何いたしませう。

西郷。　そりやいかん。輕傷のもんは、勝手に放して遣つて、重傷の者だけは早う後方へ移さにやいかん。

お弓。　はい。

西郷。　さうして、敵の眼につくやうに、病院の旗をなるべく高く立てろと注意してください。

お弓。　はい、はい。

西郷。　それから、進藤勇吉は其後あんたの病院の方へ引取つたのでごはしたな。よく氣をつけてやるやうに賴みます。

お弓。　わたくしが負つてまゐりませう。

西郷。　賴みます、賴みます。

お弓。　御めんください。

（お弓は引返して走り去る。小銃亂發。西郷は立つたるまゝにて考へてゐる。下のかたより虎吉が先に立ち、薩軍の兵士十二三人出づ。）

兵一。　味方の一部が徐々に退却をはじめたので、敵はいよ〳〵追擊戰に移つたやうでごはす。

兵二。　どこへか本營を移さにやいけません。桐野さんも今すぐに見える筈でごはす。

兵三。　早うお支度をねがひます。

（兵士等は庭にある薦包みの類をあわたゞしく運び出す。虎吉は緣にあがりて、胴籃や雜囊のたぐひを取る。）

虎吉。　（西郷に。）もし、大切のものはこれだけでございましたか。まだほかに忘れものは……。（うろ〳〵見廻る。）

西郷。まあ、そんなに騒がんでも可い。

虎吉。さあ、早く剣をお着けなさい。

（虎吉は壁にかけたる剣を把つて、西郷に着けさせる。下のかたより雨倉彌太郎走り出づ。）

雨倉。先生。いよ〳〵退却でごはすぞ。（云ひすて、引返してゆく。）

西郷。（思案して一旦つけたる剣を解く。）これは陸軍大將の軍服ぢや。これを着て居つちやいかん。和服を持つて來てくれ。

虎吉。（不審さうに。）和服でございますか。

西郷。さうぢや。いつもの筒袖で脚絆草鞋ぢや。大小も持つて來い。

虎吉。はい、はい。（奥へ駈け込む。）

（西郷は剣を置きて、上衣のボタンを外しかける。下のかたより鮫島新七走り出づ。）

鮫島。本營は木山町へ引移ることに決つたさうでごはす。

西郷。木山町へ……。桐野が云うたか。

鮫島。はあ。

西郷。桐野が云うてもいかん。西郷は退却せんことに決めた。

鮫島。え。

西郷。西郷は彈の飛んで來る方へ進んで行くんぢや。味方はみな退却しても構はん。わし一人で進んで行くんぢや。桐野や森田にもさう云うてくれ。

鮫島。はあ。

（鮫島はおどろいて早々に引返してゆく。奥より虎吉は飛白の筒袖、兵兒帶脚絆、大小、草鞋などをかゝへて出づ。）

西郷。さあ、早う着換へさせてくれ。

（西郷は軍服をぬいで和服に着かへ、尻を端折りて脚絆をはき、緣に腰をかけて草鞋をはいてゐる。）

虎吉。まだ何か忘れ物はないかな。

（虎吉はうろ〳〵そこらを見まはしながら奥に入る。森田金八郎、軍服、脚絆、草鞋にて足早に出づ。）

森田。西郷さん。いよ〳〵圍みを解いて總退却より外はごはせん。

西郷。今も桐野に云うて遣つたんぢやが、わしは退却せんことに決めた。西郷はひとりで敵陣へ向つてゆく。

森田。（おどろく。）あんた一人で……。

西郷。（しづかに。）森田さん。無事に東京まで行き着いたりや西郷が謀叛人でないといふ明りも立つたぢやらうが、斯うなつてはもう是非がない。いつまでも賊徒の名を負うて、無益の戰ひをつゞけて居るよりも、軍服をぬいで敵彈の前に立つて、潔よくこの胸を撃ちぬかれて死にたいと思ふ。あんた等は若い者どもを引きまとめて、一刻も早う無事にこゝを退却してくれ。

森田。（うなづく。）判りました。あんたの心持はよう判りました。西郷さん。あんたがその決心なら森田も一緒に死にませう。

西郷。あんたも死ぬ……。

森田。わたくしも死にます。あとの事は桐野にたのんで、若い者どもは無事に退却させて、あんたと二人で手をひいて敵にむかひませう。

西郷。（森田の手を把る。）森田さん。あんたの心持もわしには好う判つてをる。西郷と一緒に死なうといふ志は嬉しい。併しあんたは今死ぬには及ばん。あんたが死んでしまうたら、この敗軍をひき纏めるのは桐野一人ぢやむづかしい。どうしてもあんたにも手傳うて貰はにやならん。

森田。いや、それならば桐野ばかりでなく、別府も居ります。邊見もをります。わたくしが居らんでも何うにでもなります。森田はどこまでもあんたと一緒に行きます。（西郷の手をかたく握る。）あんたを斯ういふ羽目に落したのは我々の罪でごはす。あんたを置去りにして何處へ行かれますか。

（森田は落涙す。西郷も少しくかんがへてゐる。下の方より石村賢次郎走り出づ。）

石村。（この體を見て、少しく躊躇しながら。）先生。

西郷。なんぢや。相良は無事ぢやつたか。

石村。（悄然として。）先生の御推察通りでございました。

西郷。むゝ。自殺したか。

石村。相良は腹を切つて死んで居りました。

森田。相良はやつぱり割腹したか。あいつも薩摩の若い者ぢや。さうかも知れんなう。

（三人は顏を見あはせる。下のかたより桐野利秋、軍服、脚絆、草鞋、竹の杖を持ちて出づ。）

桐野。西郷さん。支度は宜しうごはすか。

（西郷は默してゐる。）

桐野。（進みよる。）鮫嶋から今聞きましたら、あんたは退却せんと云うたとか。そりや何ういふわけでごはすか。なにかの間違ひでごはせうが……。

西郷。（靜かに。）いや、間違ひぢやない、西郷はひとりで敵に向つてゆく。委しいことは森田さんから聽いてくれ。

桐野。いや、聽くには及びません。どんな事情があらうとも、あんた一人を敵へ遣つてどうなりますか。（更に進みよりて西郷と向き合つて立つ。）西郷さん。この際そんなこと云ふとつちやや困るぢやごはせんか。あんたと生死を俱にすると誓うて來た一萬何千人の若い者どもは何うなりますか。あい等は皆あんた一人のために、あゝして命賭けで働いてをるんでごはすぞ。この熊本ばかりぢやない、田原坂、植木、木葉、山鹿、高瀬、川尻の方面で、もう何千人も死んで居りますぞ。あんたが今中途で腰拔けがしてしまうたら、生きてをる者、死んだ者、可哀さうに皆どうなりますか。

西郷。可哀さうぢやから、わし一人が敵にむかつてゆく。死んだ者は仕方ないが、せめて生きてをる者だけでも救ひたい。西郷ひとりが死んだら皆救はるゝんぢや。

桐野。いや、救はれません。生きてをる者も賊徒の名を負うて、皆それ〴〵に處刑されにやなりません。あんたは可哀さうぢやと口では云ふちよるけれど、ほんたうに薩摩の若い者どもを可哀さうぢやと思うては居られんのでごはせう。

西郷。なぜぢや。何故そんなことを云ふか。

森田。わしにも判らんなう。

桐野。森田。貴公までが逆上せちや困る。なぜ西郷さんを止めてくれんか。（西郷に。）なあ、あんた。あんたが一人で敵陣にむかうてゆくといふのは、自分ひとりのためではごはせんか。

西郷。わしは降參に行くんぢやないぞ。

桐野。そりや勿論判つて居ります。あんたは一人で戰死する決心でごはせう。併しあんたは何のために死急ぎをするのでごはすか。あんたは自分ひとりの苦みを逃れたい爲ではごはせんか。

西郷。むゝ。（少し行きづまる。）

桐野。まあ、おかけなさい。（西郷を押戻して、緣に腰をかけさせる。）あんたは賊と云はるゝことを甚く苦に病んでござる。さうして、一刻も早う死なうと決心してござる。なるほどあんた

一人はそれでもようごはせう。併しくどくも云ふ通り、それで大勢の若い者がどうなりますか。死んだ者は犬死、生きて居る者は狂ひ死、それでもあんたは構はんと云ふんでごはすか。

（西郷は苦悶の眉をひそめて默してゐる。）

桐野。（しづかに。）現在の西郷は自分ひとりの西郷ぢやごはせん。薩摩の若い者全體の西郷先生でごはすぞ。生くるも死ぬも、あんた一人の自由にやなりますまい。（森田に。）森田、よく見い。これは鹿兒島を出る時から持つてをる竹杖ぢや。

森田。むゝ、まだ折れんなう。

桐野。まだ折れん。桐野の杖はまだ折れんぞ。熊本のかこみを解いて、一旦退却したからと云うて、捲土重來といふことを貴公等は知らんか。薩摩、大隅、日向、この三ケ國を根據地にして、要害をたのんで防いだら、二年でも三年でもまだ〳〵持堪へることが出來る。さうして、おもむろに天下の形勢を窺ふんぢや。

森田。むゝ。（考へる。）

桐野。躁つちやいかん、狂ふちやいかん。戰爭といふものは然う手輕う埒のあくもんぢやない。最後までの忍耐が肝心ぢや。最後の五分間といふことを貴公も學校で生徒どもに教へて居つたぢやないか。

（森田も默してゐる。下のかたより雨倉彌太郎と有馬銀之助走り出づ。）

雨倉。輜重はみな運搬させましたが、戰鬪部隊はどこから先づ退却しますか。

有馬。命令がないと混亂するぢやらうと思ひますが……。

桐野。勿論ぢや。おれが今ゆく。西郷さん、ようごはすか。森田も判つたぢやらうな。

（桐野は雨倉、有馬と共に下の方へ急ぎゆく。小銃の音はげしく聞ゆ。奥より虎吉出づ。）

虎吉。おゝ、また無暗に擊出したな。

（虎吉は下の方へゆきて見る。森田は腕をくみながら上の方へゆきて立つ。西郷は緣に腰をかけたるまゝにてぢつと眼を瞑ぢてゐる。）

石村。（しづかに進みよる。）先生。

（西郷は無言にて顏をあげる。）

石村。やはり退却でございますか。

（西郷は矢はり無言にて石村の顏をみる。石村は西郷の苦しい心持を察したやうに嘆息する。小銃

の音つゞけて聞ゆ。）

（二）

熊本市外、木山町に通ずる寂しき街道にて、正面には菜畑をへだてゝ肥後の山々みゆ。まん中より少しく上のかたに櫻の大樹あり。

（おなじ日の午前、雨すこしく降る。向ふより永山萬次は頭に繃帶して小銃を持ち、武上一作の手をひきて出づ。武上はやはり左の足をまきて跛足をひき、小銃を杖にしてゐる。）

永山。どうぢや。あるけるか。

武上。むゝ、大丈夫ぢや。ほかの者はどうしたかなう。

（二人はうしろを見かへりながら舞臺に來る。やがてあとより遠澤正安は額に少し繃帶して胡弓を持ち、つゞいて負傷兵五人、それ〴〵に頭や手足に繃帶して出づ。）

遠澤。生憎に少し降つて來たな。おゝ、永山も武上もそこに居つたか。

永山。みんな來たか。こゝまで來れば大丈夫ぢや。少し休まう。（土にあぐらを掻く。）

遠澤。なにしろ、あんなに彈が飛んで來ちやかなはん。忌々しい奴等ぢや。

武上。まあ、待て。一旦は退却しても、やがて又盛返して見するから。

永山。さうぢやとも……。おれもこの頭の疵が癒つたら、もう一度働かにやならん。

一同。（口々に。）殘念ぢやなう。

遠澤。おれは殘念で堪らんから、わざと悠々と落ちついてゐて、お弓さんに叱られた。はゝゝゝはゝゝ。それでも見い。うろたへて逃げまはらん證據には、ちやんとこれを持ち出して來たぞ。（胡弓を見せる。）

永山。はゝ、馬鹿な奴ぢやな。軍に負けていよ〳〵乞食する積りか。捨てゝしまへ。

遠澤。折角持つて來たもんぢや。捨てるも惜い。誰か貰はんか。

一同。いらんな。

武上。そんなもん誰が貰うか。貴樣は胡弓ばかり大事にして、肝心の鐵砲を忘れて來居つたぢやないか。呆れた奴ぢやな。

永山。やつぱり貴樣もうろたへて居るんぢや。

一同。　はゝゝゝゝ。

（雨の音すこしく強くなる。向ふより星崎お弓は手拭にて頭なつゝみ、褄をかゝげ、進藤勇吉の手ひいて出づ。勇吉は眼より頭に繃帶して、竹笠をかぶり、木の枝を杖にしてゐる。）

お弓。　氣をつけておいでなさい。もつと負つて行つてあげませうか。

勇吉。　いえ、いつまでも負つて頂いてはあなたが疲れませう。この杖があれば大丈夫あるかれます。

お弓。　ようござりますか。雨がふり出したので路がだん〳〵惡くなつて來ました。

（お弓は勇吉をいたはりながら舞臺に來る。）

永山。　おゝ、お弓さん。勇吉どんを連れて來て下されたか。

お弓。　皆さんは大層お早うござりましたな。あいにくの雨でさぞ御難儀でございましたらう。

武上。　われ〳〵は馴れてをるから左のみ驚きもせんが、あんたは困つたぢやらう。

遠澤。　おまけに勇吉どん連れて居つちや猶更ぢや。

勇吉。　なにしろ兩方の眼が明かれんので困ります。

遠澤。　まつたく困るなう。おゝ、丁度いゝ。あんたにこの胡弓やらう。どうぢや。

勇吉。　わたしは胡弓をひくことを知りません。

遠澤。　知らんでも可い。たゞ彈いてさへをりや、眼の不自由な者には慰みになるもんぢや。

お弓。　では、わたくしがおあづかり申して置きませう。（胡弓をうけ取る。）

永山。　やつぱり捨てんで持つて居つた方がよかつたかな。

遠澤。　それ見い。貴公等に英雄の心がわかるか。

武上。　なにが英雄ぢや。こんな奴に構はんで、もうそろ〳〵行かうぢやないか。

一同。　行かう、行かう。

（人々は起ちあがるもあり、草鞋の紐をむすぶもあり、思ひ〳〵に支度をしてゐると、向ふより木島お夏、櫻井お浪も身輕にいでたちて出づ。）

お夏。　おゝ、星崎さん。眼の不自由な病人を連れながら、あなたは隨分足がお早い。

お浪。　わたくし共は一生懸命にあるいて來て、やう〳〵こゝで追ひ付きました。

お弓。　あなた方にお目にかゝつて、わたくしも安心しました。さあ、御一緒にまゐりませう。

お夏。　まゐりませう。

お浪。　みなさん。

お弓。

三人。　ごめん下さい。

（お弓は勇吉の手をひき、お夏とお浪もつゞいて上のかたに去る。永山、武上、遠澤、その他の負傷兵もつゞいて去る。雨の音。向ふより矢ばり薩軍の兵士五六人、足早に出で來りて上のかたに去る。やがて四五人、これも向ふより出で來りて、足早に上の方に去る。

やがて向ふより飯原勝彌と鮫島新七が先に立ち、銃を持ちたる兵士十餘人、そのあとに西郷をのせたる駕籠出づ。二人の人夫が駕籠をかつぎ、駕籠の前後に二本つぎの長き白布をつけて人夫四人がそれを擔ぎ、さながら早打駕籠のやうにして荷ひ出づ。そのあとにも銃をたづさへたる兵士二十餘人附添ひ、最後に虎吉が胴亂と雜嚢を肩にかけて出づ。雨の音いよ〳〵強くなる。）

飯原。　（空を仰ぐ。）おゝ、雨が強くなつて來た。しばらく駕籠をそこへ下せ。

鮫島。　こゝまで來たら急ぐにも及ぶまい。

（人夫は心得て、西郷の駕籠を櫻の木の下におろす。）

虎吉。　おゝ、降る、降る。（人夫にむかひて。）木山の町まではまだ何のくらゐあるね。

人夫一。　木山まではまだ三里もあるかなう。

人夫二。　さうぢや。どうしても其位はありませうよ。

虎吉。　旦那樣は重いから骨が折れるだらうが、まあ勉強して遣つてください。

西郷。　誰か水を持つちよらんか。

飯原。　はあ。

（飯原は腰につけたる水嚢を取りて西郷にさゝぐれば、西郷は駕籠のなかにて旨さうに飲む。）

鮫島。　（自分の水嚢を取る。）もつと差上げませうか。

西郷。　いや、もういらん。（眼を瞑ぢてゐる。）

虎吉。　もし、鮫島さん。旦那樣が飲まないと仰しやるなら、その水をわたしの方へまはして呉れませんか。

鮫島。　（あわてゝ水嚢を隱す。）えゝ、おまへに飲まれて堪るもんか。この場合には一滴でも大事の水ぢや。

虎吉。　若い人はどうも意地が惡いな。

西郷。　（眼をひらく。）石村はどうしたか。

飯原。　さあ、途中までは一緒に來たんでごはすが、いつか姿が見えなくなりました。

虎吉。　ほんにあの人が旦那樣のおそばを離れるといふのは不思議だな。もしや彈にでもあたつた

のではあるまいかな。

鮫島。　東京の者ぢやで、敵に降參したかな。

西郷。　石村は默つて降參するやうな男ぢやない。降參するなら正直にわしに斷つて、暇乞ひをしてゆく筈ぢや。

飯原。　さうでごはせうか。

虎吉。　旦那樣のおつしやる通り、石村さんは降參するやうな人ではない。彈に中つたか、それともあとから追付くか。（云ひかけて向ふを見て。）それ、どうだ。わたしの占ひがちやんと中つた。あれ、あの通り、石村さんが一生懸命に駈けて來ますわ。

（人々も向ふを見る。）

飯原。　なるほど、あとから駈けて來るのは石村らしいぞ。

鮫島。　たしかに石村ぢや。

一同。　石村ぢや、石村ぢや。

石村。　（一同に。）いや、遲くなつた。（駕籠のまへに來て。）先生、おくれて相濟みませんでした。

西郷。　お前が途中で見えなくなつたと云うて、みなが案じて居つたところぢや。

石村。　途中まで出てから急に氣がつきましたので、あわてゝ引返して取つてまゐりました。

西郷。　なにを取りに行つたか。

石村。　これでございます。

（石村は腹にまき付けたる「新政厚德」の旗を取つてみせる。）

西郷。　おゝ、旗か。

石村。　本營の軒先に立てたまゝで忘れて來たのを思ひ出しまして、彈の中をくゞつて取つて來ました。

西郷。　それは御苦勞ぢやつた。その旗を敵に奪はるゝのも殘念、よう取つて來てくれたなう。

（旗を取りてながめる。）今頃はこの旗を東京に立てる積りであつたが……。先づおまへにあづけて置く。しつかりと守つて行つてくれ。

石村。　かしこまりました。（再び旗をうけ取りて腹にまき付ける。）

西郷。　して、あとはどんな樣子であつた。

石村。　退却掩護のために殘された二三の部隊が必死になつて戰鬪最中で、どうしても明日一杯は

持堪へると云つて居りました。

西郷。　勝誇つた敵の大軍をひき受けて、あす一杯持堪へるのは、よほどの苦戰ぢやらうな。退却掩護の役目を首尾よう果たしてからが、おそらく全滅ぢや。

（人々は顔を見あはせて、全滅全滅とさゝやき合ふ。）

西郷。　若い者を見殺しにして、わし一人逃げちや何うもならん。おい、駕籠を戻してくれ。戻してくれんか。

石村。　それはいけません。

（石村、飯原、鮫島の三人は駕籠の棒をおさへる。）

西郷。　いけんと云うて、このまゝぢや居られん。（駕籠を出ようとする。）

一同。　（口々に。）先生。

（兵士等は一度に走せ寄つて西郷を遮り、垣を作りしやうに其前にひざまづく。雨の音。）

——幕——

第六幕

日向國長井村の農家。まん中より下のかたによせて二重屋體、下のかたに竈所のある心にて、空の米俵幾俵を積んであり。正面は破れ障子をしめて、前づらは廣き廻り縁、よきところに木の幹を切りたる踏段あり。上のかたの正面より表へ出づる通路のある心。上のかたには青菊蔕の棚あり。棚の下より奥へかけて唐蜀黍が澤山に長く伸びてゐる。秋草もそこらに咲きみだれてゐる。奥の方に可愛ゲ嶽黒くみゆ。

（八月十七日の宵。敵の砲撃の目標となるを恐れて陣中には火を點さぬとおぼしく、家内は眞暗にて、縁側に持ち出したる古きテーブルの上に一本の蠟燭を立て、その薄暗き火にむかひて、西郷は紺がすりの筒袖、兵児帶にて古椅子に倚り、詩集を讀んでゐる。進藤勇吉は盲目にて廻り縁の角に腰をかけ、しづかに胡弓をひいてゐる。星崎お弓は疲れ果てたる體にて下のかたの米俵に倚りかかり、うと〳〵と眠つてゐる。幕のあかぬ前から時の鐘の聲三つ四つきこえ、幕あきても午後八時の鐘を半ほど打切るまでは一同沈默。やがて西郷は椅子を起つて縁より空を仰ぐ。鐘の聲つゞけて聞ゆ。）

西郷。（ひとり言。）暗いなう。

勇吉。（胡弓をやめる。）暗うございますか。

西郷。暗い。星一つも見えん。

勇吉。そんなに暗うございますか。

西郷。むゝ。（蠟燭を把つて、下のかたを照して覗る。）お弓さん、よう眠つてをる。よほど疲れて居ると見えるなう。

勇吉。先生は何をしていらつしやいます。

西郷。わしか。わしは詩集をよんでをる。勇吉どん。あんた胡弓がえらく上手になつたやうぢやな。（打笑む。）

勇吉。遠澤さんに貰うてから、もう五ケ月ほどになります。

西郷。毎日彈いてをるので自然に上手になつたんぢやらうよ。あんたにその胡弓をくれた遠澤も、人吉の戦ひで討たれてしまうた。

勇吉。この胡弓が形見になつてしまひました。

西郷。遠澤も元氣のよい奴ぢやつた。あんたその胡弓をいつまでも形見に持つてゐて遣りなさい。

勇吉。遠澤も喜ぶぢやらう。

西郷。かうして胡弓を彈いてをりますと、遠澤さんや、相良さんや、永山さんや、みんなの人の顔が眼のさきに浮んでまゐります。お母さんの顔も……。

勇吉。お母さんの顔も……。あゝ、どの人もみな西郷のために死んでくれたんぢや。

西郷。（少時の沈默。秋の蛙の聲きこゆ。）（耳をかたむける。）蛙が鳴いて居りますな。

勇吉。むゝ。蛙が鳴いてをる。（氣がついたやうに。）勇吉どん。そんなところに出て居つて寒うないか。まだ八月の半ぢやが、鹿兒島と違うてこゝらは山國ぢやで、朝夕はめつきりと秋らしうなつて、草の葉にももう夜露がしつとりと降りてをる。冷えて感冒引いちやいかんぞ。

勇吉。いえ。別に寒いとも思ひません。お弓さんはまだ寢てゐますか。

西郷。あんたの胡弓を聽きながら、赤兒のやうにすや〳〵と眠つてしまうた。ほんにあんたばかりぢやない、お弓さんも夜露にうたれて冷えると惡いな。

勇吉。わたくしが起しませう。（探りながら起ちかゝる。）

西郷。いや、あぶない。お弓さんはわしが起してやります。

（西郷は草履を穿いて縁より降り立ち、お弓の枕もとに歩みよる。蛙の聲絶えずきこゆ。）

西郷。お弓さん、起きんか。お弓さん、お弓さん。

お弓。（薄く眼をあく。）はい。

西郷。日が暮れて冷えて來ましたぞ。冷えると悪い。起きたが好うごはすぞ。

お弓。はい、はい。（起き直る。）勇吉さんの胡弓を聽きながら、ついうと〳〵と眠つてしまひました。

西郷。疲れ切つてをるんぢやから無理はない。この頃は負傷者ばかりぢやない、病人も殖えてならん。あんたも氣をつけて下さい。

お弓。（耳をかたむける。）けふは晝間から珍しく鐵砲の音がきこえません。

西郷。敵は四方を取圍んで、われ〳〵を袋の鼠にしてしまうたので、先づ一息ついて居るんぢやらう。それはやがて總攻撃に移る準備で、風雨の前の沈默ぢや。その沈默を破るのは今夜の曉方か、おそくも明日の午頃か。（さびしく笑ふ。）お弓さん。油斷しちよると、今までにないやうな怖ろしい鐵砲の雨が降つて來るかも知れませんぞ。

お弓。さうかも知れません。（起つて空をみる。）今夜は暗い晩でございます。もう何時頃でございませう。

西郷。わしの時計はもう毀れてしまうたが、どこかの寺で今撞いて居つた鐘は八時のやうでごはした。

お弓。まだ八時頃でございますか。あんまり暗いので、もつと夜更けかと思ひました。僅かばかり眠つてゐるあひだに、いろ〳〵の夢を見るものでございますな。

西郷。どんな夢を見ました。（縁に腰をかける。）

お弓。死んだ兄に逢ひまして、熊本籠城のいくさを見せて貰ひました。

西郷。あんたの兄さんはいよ〳〵戰死ときまりましたか。

お弓。はい。四月の十二日に段山で戰死したといふことが、此頃になつて確かに判りました。兄妹が敵味方になつたまゝで、たうとう別れてしまつたのでございます。

西郷。森田はあんたを城中へ使に遣らうと云うたが、わしが反對で止めさせてしまうた。あの時に行つたら、兄さんの生きてをる顔が見られたんぢやつたが、あんたも定めて殘念でごはせうな。

お弓。いえ、わたくしはもう諦めてをります。

（お弓は竊と眼をふく。西郷は默してかんがへてゐる。勇吉も默して聽きすましてゐる。奥の庭口より虎吉は米を入れたる麻袋を肩にかけ、一尾の鯉を草の葉につゝみて提げて出づ。）

虎吉。　暗い、暗い。いくら大砲の彈が怖いと云つて、これでは何うにもならない。（緣先に來る。）

お弓。　おゝ、ぢいやさん。お歸りでしたか。

西郷。　大層遲かつたな。どこまで行つた。

虎吉。　どこまで行つたか自分にも判りません。なんでも三四里ばかり駈けあるいて來ました。

西郷。　むやみに遠いところへ出て行つて、敵にでも見付かつたら何うにもならんぢやないか。

虎吉。　わたくしもそれを知らないではございませんが、延岡の軍が負けてからといふものは、兵糧もだん〳〵乏しくなりまして、この十日ばかりは碌なものも旦那樣に差上げることが出來ません。

西郷。　それはおればかりぢやない。軍に負けたら誰も彼も皆その不自由を堪へにやならん。

虎吉。　それでもあんまりお氣の毒でございますから、せめて川魚の一尾も探してまゐらうと思ひまして、近所の町まで買ひに出ましたが、まつたく負軍となりますと情ないものでございます。（財布より紙幣を出す。）今までどこでも立派に通用して居りました此の札が十圓や五圓はおろか、二十錢札でも十錢札でも受取るものがございません。西郷札なんぞはもう駄目だと申しまして、誰も振向いても見ないのでございます。

お弓。　その西郷札では誰も品物を賣つてくれないのでございますか。

虎吉。　そんなものは反故紙も同樣だと、どこでも受取つてくれないのでございます。

西郷。　西郷が發行した紙幣ぢや。西郷がほろぶれば反故になる。受取らんのも道理ぢや。

虎吉。　よんどころ無しにそれからそれへと、遠いところまで出かけまして、やう〳〵のことでこの鯉を一尾買つて來ました。足下をみて高いこと、これが一尾一圓でございます。（草の葉をあけて鯉を見せる。）

お弓。　この鯉が一尾一圓……まあ。（おどろく。）

西郷。　（笑ふ。）まかり間違へば反故になる其紙幣ぢや。一圓が二圓でも高いことはあるまい。

虎吉。　それから米の無かつたことも思ひ出しましたので、その歸りに病院に寄りまして、白い米をこれだけ貰つてまゐりました。（麻袋を見せる。）

西郷。　（下の方の米俵を指さす。）あれに米はないのか。

虎吉。　あれはもうみんな空俵でございます。

西郷。（思案して。）お弓さん。あんた饑うごはすか。

お弓。いゝえ、別に……。

西郷。それならば我々は食はんでも可い。病院へ持つて行つて戻して來い。このごろは糧食が乏しいので、病院にをる大勢の負傷兵や病人にも食ふもんが十分に行き渡らんとか聞いてをる。その病院から一合の米でも減して來ちやいかん。すぐに戻して來い。

虎吉。はい。

西郷。その魚もおれは要らん。みなが食ふや食はずで苦んでをる最中に、おれ一人が生魚食ふちや居られん。それも一緒に病院へ持つて行つて、誰かに食はしてやれ。

虎吉。はい。

西郷。折角遠いところから態々買うて來て氣の毒ぢやつたが、おれに食はすと思うて病院へとゞけて來てくれ。

虎吉。（眼をしばたゝく。）はい、はい。判りましてございます。では、この米は病院へ戻してまゐりませう。魚も賄方へまはして、誰かに食はせることに致しませう。

お弓。たび〳〵御苦勞でございますな。

虎吉。なに、すぐに行つてまゐります。

（虎吉は米袋と鯉を持つて、引返して出てゆく。蛙の聲。）

西郷。あ、しまうた。虎吉を出してやるなら、蠟燭を一本取つて來て貰へばよかつた。もうこの通り燃えてしまうた。

お弓。ほんに蠟燭がたつてしまひました。では、すぐに追掛けて行つて、ぢいやさんに賴んでまゐりませう。

西郷。お氣の毒でごはすな。氣をつけて行つてください。

お弓。はい、はい。

（お弓も表へ出てゆく。）

西郷。（椅子にかゝる。）勇吉どん。あんたほんたうに冷えるといかんぞ。内へあがつたらどうぢや。

勇吉。はい。

西郷。お弓さんは饑うないと云うてゐたが、あんたはどうぢや。唐蜀黍燒いてあげようか。

勇吉。いえ、喫べたくなればお弓さんにたのみます。

西郷。お弓さんも病院の方と掛持ぢやで、隨分疲れてをる。わしが燒いてあげう。

（西郷は草履をはいて庭に降り、上の方へゆきて、畑の唐もろこし四五本を折り、そこらの枯枝などをかゝへて來る。）

西郷。わしはこれで唐蜀黍を燒くことはなかゝ上手ぢや。勇吉どん、旨う燒いて食はしますぞ。

（西郷は笑ひながら土の上に枯枝をつみ、マッチの火を擦りつける。）

西郷。敵の方から見えるといかんで、あまりに火を大きう焚くことは出來んが、あんたもこゝへ來てあたつたら何うぢや。

勇吉。ありがたうございます。

（西郷は勇吉の手をひきて火のそばに連れて來る。）

西郷。（唐蜀黍の皮をむきながら。）勇吉どん。あんたに云うて置くことがある。あんたも眼が見えんでも大抵判つてをるぢやらうが、我々もこの日向の國に引籠つて今まで隨分働いてみたが延岡のいくさが負けてから我々の運命ももう極まつた。こゝは日向の北のはづれの長井といふ小さい村で、三方は高い山につゝまれてをる。その袋のやうな狹いところに追ひつめられて、敵の大軍が四方を隙間なく取りまいて居る。もう何うにもならん。かうなつたら一同が手をつかねて敵に降伏するか、最後の一戰をこゝろみて全滅するか、一方の圍みを突き破つて出るか、この三つのうちを擇むよりほかはない。

勇吉。御もつともでございます。

西郷。（焚火に枝をくべながら暫く沈默。）なあ、勇吉どん。かう云うて聞かせたら、あんたも判つたぢやらう。あんたのお母さんの死際に約束して、あんたのからだは西郷が引受けてをる筈ぢや。わしは何處までもあんたの世話をせにやならん。こゝであんたを突き放しては……まして眼の不自由な不具者のあんたを……此まゝ突放してしまふのは餘りに無慈悲ぢや。第一にあんたのお母さんに相濟まん。なあ、さうぢやないか。もしも他人がそんな不人情なことし居つたら、わしは決して赦しやせん。（やゝ興奮して。）わしはそいつの横つ面に痰唾吐きかけて撲しつけてやる。（云ひかけて嘆息する。）その不義理な、不人情な、無慈悲な人間に、どうしてもならにやならん羽目になつたかと思ふと、わしはいかにも殘念ぢや。この胸が切ない。併しもう何うにもならんのぢやからなう。西郷は殘念ながらあんたに別れにやならん。

勇吉。先生。（探りよる。）

西郷。あんたはこゝでおとなしう敵に降參してください。いや、無分別なぞ起しちやいかん。そ

れは齗然いかん。あんたはまだ年が若い、まして眼の見えん者ぢや。降參したとて恥辱でもなんでもない。敵の方でも降るものは殺さずと觸れて居るんぢやから、おとなしう降伏さへすりや決して命を取らるゝやうなことは無い。お弓さんと一緒に敵陣へ行つて降參しなさい。ようごはすか。

勇吉。はい。

西郷。（念を押すやうに。）ようごはすか。かならず短氣なことをしちやなりませんぞ。

勇吉。はい。

西郷。あゝ、話の方に氣を取られて、唐蜀黍燒くことを忘れてしまうた。

（西郷は唐蜀黍を火にかざす。表の方より銃を持ちたる兵士一人入り來る。）

兵士。西照といふ出家がまゐりました。通しても宜しうごはすか。

西郷。西照さんが來た。（少しかんがへて。）むゝ。逢はう。通してくれ。

兵士。はあ。（引返して去る。）

西郷。勇吉どん。お客さんが來たといふから今は燒いてをられん。あとで燒いてあげるから、あんたは少し奥へ這入つてゐなさい。

勇吉。はい。

（西郷は唐蜀黍を緣に置きたるまゝ、勇吉の手をひいて奥の障子のうちへ連れ込む。表の方より西照、やはり旅姿にて出づ。）

西照。西郷さんはおいでゝござりますか。

西郷。（障子をしめて出る。）西照さん。西郷はこゝに居ります。

西照。おゝ、西郷さん。

西郷。まあ、おかけなさい。

（ふたりは列んで緣に腰をかける。）

西郷。熊本以來ぢやから、もう足かけ五月になる。あんたはあれから何うなされた。

西照。どこまでもお供しようと思うてゐましたが、どうも若いお人達に嫌はれましてな。（微笑む）あなたが熊本から木山の町へお引揚げになつた時にも、わたくしはあとを慕うてまゐりましたが、貴樣のやうな奴の來るところぢやない、貴樣のやうな奴がゐるから軍が負るんぢやと、若いお人達に叱られまして、たうとう無理無體に追ひ拂はれてしまひました。

西郷。あゝ、さうでごはしたか。若い者どもが苛い失禮をして申譯ありません。どうぞ堪忍して

遣つてください。

西照。その御挨拶では痛み入ります。それからすぐに西京へ戻らうかとも思ひましたが、さて何うも氣にかゝりまして……、おなじ宗旨の寺々を泊りあるいて、今日までよそながら成行を窺うて居りました。

西郷。ありがたうごはす。（一禮する。）その西郷もこの始末で面目次第もごはせん。

西照。（嘆息する。）たゞ〳〵お氣の毒に存じます。そこで、西郷さん。過ぎ去つたことはもう云はぬとして、あなたはこれから何うなさる思召でござります。

西郷。（考へる。）ほかならぬあんたのおたづねぢやで、なにも彼も委しう話したいのでごはすが、もう少し待つて居つて自然の成行を見てください。

西照。さう仰しやれば強ておたづね申す譯にもまゐりますまいが、西郷さん、わたくしの思ふこととをこゝで云うても宜しうございますか。（左右を見かへる。）

西郷。仔細ごはせん。遠慮なく云うてください。

西照。あなた、もう斯うなつたら降參せられては何うでござります。

西郷。（しづかに。）西照さん。あんたは敵の使に來たのでごはすか。敵にたのまれて來たのでごはすか。

西照。いや、誰に賴まれて來たのでもございません。自分ひとりの料簡でお勸め申しに來たのでございます。

西郷。（丁寧に。）ありがたうごはす。

西照。所詮見込みのない軍をいつまで續けてゐて何うなさる。いたづらに敵味方の人命を損ずるばかりではございますまいか。

西郷。全くあんたの云ふ通りぢや。（うなづく。）それにはわたしも胸を痛めて居ります。しかし今更降參は出來ん。折角ぢやが、お斷り申します。

西照。降參は御不承知でございますか。

西郷。承知不承知は扨措いて、今の西郷の立場として、そんな卑怯なことが出來るもんぢやごはせん。

西照。では、どうなさる。こゝで最後まで戰ひつゞける御決心でございますか。

（西郷は默してゐる。）

西照。それとも一方の圍みを破つて、どこへか御引揚げになりますか。

（西郷は矢はり默してゐる。うしろの方にて小銃の音遠くきこゆ。）

西郷。（耳をかたむけて。）いや、味方の偵察戰でごはせう。（少しく間。）西照さん。折角たづねて來て下されたあんたに對して、なんの挨拶もせんぢや悪い。ちよつと待つてください。

（西郷は起つて障子のうちに入り、軍用行李を緣側に持出して來て、そのなかより陸軍大將の軍服を取出す。）

西郷。西照さん。これを見てください。

西照。それは軍服ではござりませんか。

西郷。さうでごはす。陸軍大將の軍服でごはすが、もういよ〳〵入用がなくなりました。熊本を出る時に、もう脫いでしまはうと決心しながら、わたしは氣の弱い男ぢやで……。みんなから無理に再び着せられて、それから五ヶ月の苦しい月日を送つて居りましたが、今度といふ今度はもう着ますまい。わたしは重荷をおろします。

西照。むゝ。（西郷の顏を見る。）

西郷。西郷隆盛は既に陸軍大將の官職を剝奪されて居りますから、今までこの軍服を身に着けてゐたといふのは、上に對しても恐れ多いことでごはした。

（西郷は庭に降り立ちて焚火をかき起し、更に枯枝を折り焚けば、火は熾に燃えあがる。西郷はやがて軍服をその火に入れて燒く。西照も珠數を持ちて火のそばに立寄る。ふたりはその烟をながめて暫らく無言。）

西郷。西照さん。これがわたしの御挨拶ぢや。

（西照は無言にて首肯きながら頭を垂れる。）

西郷。正直をいふと、熊本に居つた時分には、わたしは何うもあんたの顏を見るのが忌ぢやつた。あんたのお師匠さんに睨まれてゐるやうで、なんだか怖ろしい思はれてならんかつた。それが今夜はどうでも無い。昔馴染のなつかしい西照さんぢや。それも心の重荷が卸りたせるでごはせう。わたしはもうあんたには逢ふまい。いや、逢ひたうないと思うて居つたが、やつぱり今夜逢へてようごはした。

西照。わたくしも既う一度お目にかゝりたいと思うて居りましたが、その念がとゞいて嬉しうござりました。では、もうこれでお暇申します。

西郷。かういふ始末で、お茶一つあげることも出來ん。えらい失禮しました。

（西照は會釋して、しづかに表の方へ出てゆくを、西郷は呼び止める。）

西郷。　あ、烏渡待つてください。

（西照は立戻る。）

西郷。　あんたにお願ひ申したいことがある。肯いてくれますか。

西照。　なんなりとも承はりませう。

西郷。　（奥にむかひて。）勇吉どん。こゝへ來なさい。

勇吉。　はい、はい。

（勇吉は奥より探りながら出る。西郷はその手を把つて西照のそばに連れてゆく。）

西郷。　西照さん。あんた此の勇吉どんを知つてをるでごはせうが……。

西照。　おゝ、知つて居ります。熊本で兩方の眼を痛めた若いお人でござりませう。病院を御見舞ひ申したときに、二度ばかりお目にかゝつたことがござりまして、あゝお氣の毒なことぢやと思うて居りました。たしかお母さんも戰死なされましたな。

西郷。　よう御存じぢや、その通りでごはす。お母さんは無い、當人は眼が見えん。こゝでまた西郷に別れたらどうなりませう。察してください。就てはまことに無理なお頼みぢやが、あんた此の勇吉どんを連れて行つて、面倒をみて遣つて下さらんか。

西照。　よろしうござります。その勇吉殿はたしかにわたくしがお預かり申しませう。

西郷。　ありがたうごはす。それでわたしも安心しました。

勇吉。　では、降參せんでも宜しいのでございますか。

西郷。　そりや判らん。途中で敵に見咎められたら、おとなしう降參するもよい。さつきも云うた通り、敵は決してあんたを殺しやせん。そりや大丈夫ぢや。

西照。　わたくしが御一緒に居りますから、かならず惡いやうには致しますまい。

西郷。　さうぢや。西照さんがよいやうにして下さる。これからは西照さんを私ぢやと思うて、素直に附いて行けばよいんぢや。

勇吉。　はい。では、先生。長々御厄介になりました。

西郷。　は、、泣いちやいかん。元氣で暮さにやいかんぞ。

勇吉。　お弓さんはまだ戻りませんか。

西郷。　お弓さんはまだ戻らん。歸つたら私からよう云うて置く。

勇吉。　なにぶんお願ひ申します。

西郷。　あんたは胡弓をどうした。わしが今取つて來てやる。（障子の中に入りて胡弓を持ち來る。）こ

れはあんたのお友達ぢや。いつまでも大事にせにやいかんぞ。

（勇吉は無言にて胡弓をうけ取る。）

西郷。では、夜の更けんうちに行きなさい。西照さん。くれ〴〵も頼みましたぞ。

西照。承知いたしました。

（西照は勇吉の手をひきて行きかゝる。）

勇吉。先生。もう一度呼んでください。

西郷。勇吉どん。

勇吉。先生……。

西照。さあ、おいでなされ。

（西照は勇吉を促して出でゆく。西郷も見送るこゝろにて、入口の方まで附いてゆく。小銃の音をり〳〵に遠くきこゆ。上のかたの唐芋畑をかき分けて、石村賢次郎忍び出で、西郷のうしろ姿をうかゞつてゐる。やがて西郷は引返して來て、石村のすがたを透し視る。）

西郷。（呑めるやうに。）誰ぢや。そこに居るのは……。

石村。石村賢次郎でございます。

西郷。石村か。

（西郷は縁にあがりて椅子にかゝる。石村は縁の前にひざまづく。）

西郷。どうぢや。偵察戰の模樣は……。

石村。どの口々もみな嚴重に圍まれてゐるやうでございます。

西郷。さうぢやらう。敵もこゝまで追ひつめて來たんぢやから、蟻の這ひ出る隙間もないやうにして、一擧に殲滅をはかる積りぢやらうよ。

石村。（にじり寄る。）就きまして、先生。

西郷。なんぢや。

石村。これから何うなさる思召でございます。

西郷。わしはまあ何うしてもよいが、おまへ達には此際思ひ〳〵の行動を取るやうに勸めたい。つまりはこゝで一先づ解散して、皆それ〴〵に運命を決めにやいかん。おまへは薩摩の者ぢやない。ことに最初からこの企てには反對ぢやつた。それにもかゝはらず、始終わしのそばに附いてゐて、今まで正直によう働いてくれたが、もうよい、もう十分ぢや。若い者がむやみに死んぢやいかん。敵の總攻擊の始まらんうちに、早う行つて降參するがよい。

石村。　折角でございますが、わたくしは死ぬまでも先生のおそばを離れようとは存じません。わたくしは何時でも先生のお供をして死ぬつもりでございます。先生。くどいやうでございますが　あなたの御決心をうけたまはりたいと存じまして、今夜竊とこゝへ參りました。

西郷。　（しづかに。）西郷の決心を聞いてどうするか。

石村。　先生がどうしても打明けて下さいませんければ、わたくしの方からお勸め申します。

西郷。　なにを勸めるのか。

石村。　（小聲に力を籠めて。）先生。御覺悟をなされては如何でございます。

（西郷は默して相手の顏をながめてゐる。）

石村。　御承知の通り、味方は人數も減り、彈藥も糧食も盡きまして、所詮もう運命は極まつて居ります。いかに躁つても、狂つても、とても盛返す力はございません。さりとて先生の御氣性として、今更降參などをなされる筈がないのは、わたくしもよく存じてをります。一方の圍みを破つて突出するといふ議論が大分勢力を得てゐるやうでございますが、わたくしにはそれが何うも不安でなりません。首尾よく成功すれば重疊でございますが、萬一それを仕損じて、途中で敵の大軍に取圍まれたら何うなりませう。先生は生捕……。

西郷。　むゝ。（うなづく。）

石村。　先生。それが殘念でございます。わたくしは殘念でなりません。（いよ〳〵熱して。）先生。あなたは一足もこゝを動いてはなりません。こゝがあなたの死場所でございます。わたくしもお供いたします。わたくしは今夜それをお勸めにまゐつたのでございます。

西郷。　深切によう云うてくれた。石村、おまへが介錯してくるゝか。

石村。　え。（聲をひくめる。）では、切腹なさいますか。

西郷。　わしの覺悟はもう決まつてをる。陸軍大將の軍服は再び身に着けんつもりで……。（焚火を指さす。）今そこで灰にしてしまうた。もう殘るものは何にもない。おまへが來てくれたのが丁度幸ひぢや。西郷の介錯してくれ。

石村。　はあ。

西郷。　さうして、桐野や森田のところへ行つてわしの首を見せてくれ。一日でも生きて居れば居るほど、わしは苦しい。わしはもうこゝらで殺して貰はにや叶はん。おまへの云ふ通り、この上に狂ひまはつたとて何うなるもんぢやない。今年の二月、暗殺問題の起つたときに、わしは自分ひとりで東京へ出て行つて、政府にそれを尋問しようと思うたんぢやが、學校

の若い者どもが取りまいて、どうしても西郷ひとりは出して遣られんといふ。桐野や森田も不承知ぢやといふ。それでたうとうこんなことになつてしまうたんぢやが、それから今日まで七ヶ月のあひだに何千人の若い者を殺したことぢやらう。可愛ゆい若い者を大勢殺して、それで西郷はどうなつたか。西郷はいつまでも賊軍の大將ぢや。大勢に引摺られて、こゝまで來たが、わしは矢はり熊本で死ねばよかつた。

石村。 それはよくお察し申して居ります、いくら先生が死なうとなされても、大勢が殺さないのでございます。いつぞや桐野さんが云はれました通り、先生のおからだは自分一人のものではなく、大勢の物になつてしまつたので、進むのも退くのも御自分の自由にはならなくなつたのでございます。どんな強い人でも大勢にからみ付かれては動かれなくなります。ましてわしは強い人間でないんぢやから、身動きの出來んのも仕方がない。併しさういつまでも人情に縛られて居つちやいかん。西郷は今こそ自由に自分の運命を定めにやならん時節が來た。（笑ひながら。）石村。おまへ見事に介錯が出來るかな。

西郷。 一生懸命にいたします。

石村。 上手に斬つてくれんぢや困るぞ。

石村。 はあ。

西郷。 では、支度をして來るから少し待て。

（西郷は消えかゝりたる蠟燭を持ちて簞笥の中に入る。石村は刀をぬきて焚火に照して視る。表のかたよりお弓は蠟燭二本を持ちて急ぎ出づ。）

お弓。 どうも遲くなりました。

石村。 え。（あわてゝ見かへる。）おゝ、お弓さん。どこへ行つてゐたのです。

お弓。 蠟燭を取りにまゐつたのでございます。して、先生は……。

石村。 え、先生は……。（口籠る。）

お弓。 どこへかお出掛けになりましたか。

石村。 いや、どこへも御出掛けにはなりません。（刀を鞘に納める。）ぢいやは何處へ行きました。

お弓。 わたくしもぢいやさんのあとを追掛けて出たのでございますが、路が暗いので判らなくなつてしまひました。

（お弓は焚火にて蠟燭を點し、緣側のテーブルの上に立てる。）

お弓。 ほんたうに先生はどこへいらしつたのでございます。

石村。奥でなにか書き物でもしてゐられるのでせう。

お弓。（縁を降りて來る。）それから勇吉さんはどうしたのでござりませう。

石村。知りません。

お弓。やつぱり奥にゐるのでせうか。

（二人はしばらく無言。蛙の聲きこゆ。）

お弓。どうして今夜はこんなに暗いのでせう。

石村。暗い晩です。

お弓。わたくし共はいつまで斯うしてゐるのでせう。

石村。さあ。

お弓。いくさには疾うに倦きてゐながら、やつぱり斯うしてゐるといふのは、自分でも判りません。

石村。西郷先生のために竭さうといふ精神からではないのですか。

お弓。それでも軍には倦きました。からだも心も疲れ果てゝしまひました。この頃のわたくしはたゞ夢のやうに日を送つてゐるのでござります。

石村。さうかも知れません。併しその軍も既うやがて終るでせう。

お弓。終るでせうか。

（表の方より森田金八郎は虎吉と共に出づ。）

虎吉。唯今戻りました。おゝ、石村さんか。

森田。（眼を鋭くして。）石村。お前はどこからこゝへ這入つて來た。

石村。え。

森田。西照といふ坊主のほかに誰も出這入りをした者はないと、入口の番兵から聞いちよつたが、おまへは誰に許されてどこから這入つて來た。

石村。（惡びれず。）このごろは表口の出入りを嚴重にあらためるので、横手の垣根を破つて這入つて來ました。

森田。味方の癖になぜそんな後暗いことをするか。

石村。西郷先生に密々に申上げたいことがあつたからです。

森田。密々に……。（腰につけたピストルを取る。）密々になにを云ひに來たか。正直に云うて見い。

石村。え。

森田。云はんか。（ピストルを向ける。）

石村。あなたに云ふ必要はありません。

森田。まはし者め。

（森田はピストルの引金をひく。その途端に、お弓は石村を圍ふやうにしてピストルの前に立ち、彈にあたりて倒れる。森田はおどろいてピストルを落す。石村もおどろいてお弓をかゝへる。）

石村。お弓さん。しつかりして下さい。お弓さん、どうしました。

虎吉。こりやまあ飛んでもないことになつた。これ、お弓さん。お弓さん。

（石村と虎吉はお弓を介抱す。森田は茫然としてながめてゐる。奥より西郷は袴を穿きて出づ。）

西郷。なんぢや。ピストルの音は……。

虎吉。お弓さんがこの通り打たれたのでございます。

西郷。お弓さんが撃たれた……。おゝ、森田。あんたが撃つたのか。

（森田は默つてゐる。）

石村。わたくしを廻し者だと云つて、不意にピストルを向けられたのでございます。

西郷。森田さん。あんたは熊本以來、兎かくに苛々して何うもならん。石村を敵の廻し者ぢやと思うたら、とりおさへて尋常に詮議すりや可いぢやごはせんか。

森田。（俄に嘆息する。）悪うごはした。この頃の森田は頭が狂うたらしい。石村は正直さうに見えても他國者ぢや。まして今度のことには最初から反對の男ぢや。味方の運命もいよ／＼蹙まつたのを見きはめて、西郷さんに降參をすゝめに來たもんぢやと、わしは一圖に思ひつめて、この手が自然にピストルにかゝつて、なんの罪もないお弓さんを撃つてしまうた。いや、わしが撃つたんぢやない。お弓さんがわざ／＼出て來て的になつたんぢや。

西郷。お弓さんがわざ／＼的になつた。石村をかばうてか。

森田。さうでごはせう。

西郷。むゝ。（かんがへる。）

森田。（進みよる。）どうぢや。お弓さんはもう息がないか。

石村。もういけません。

森田。悪いことをしたなあ。おれはどうでも頭が狂うてゐるんぢや。

虎吉。（小聲で。）石村さん。（お弓の死骸を指さす。）可哀さうだと思つてお遣んなさい。

（石村は無言にてお弓の死骸をながめてゐる。虎吉は合掌する。森田はピストルを拾ひ、腕をくみ

ながら縁に腰をかける。）

西郷。兎もかくも其死骸をそこへ置いちやいかん。家のなかへ運んで置け。

石村。はあ。

（石村と虎吉はお弓の死骸をかゝへあぐれば、西郷も手傳ひて、縁側より障子のうちへ運び込む。）

西郷。（縁に出る。）虎吉。わしの毛布でもかけて置け。

虎吉。（内にて。）はい。はい。

西郷。（テーブルの上を見て。）おゝ、新しい蠟燭がある。お弓さんが持つて來てくれたんぢやらう。（殘る一本に火を點して。）これを枕もとに立てゝ置け。

虎吉。（出で來りて蠟燭をうけ取る。）おゝ、枕團子の代りにこの唐蜀黍でも供へて置かうか。（剝いてある唐蜀黍を持つて入る。）

西郷。森田さん。あんたも死なんか。

森田。（顏をあげる。）お弓さんを殺した申譯にか。

西郷。お弓さんを殺したのは粗相ぢや。それをいふんぢやない。西郷は今夜死なうと決めて、石村に介錯して貰はうと思うて居つたんぢや。

森田。（西郷の顏を見あげる。）あんたは死ぬ……自殺するか。

西郷。むゝ。

森田。それがあんたのいつもの癖ぢや。わたしも熊本ではあんたと二人で死なうと思うたが、桐野の云ふことにも道理はある。あんたの命は自分ひとりのものぢやない、大勢の者と運命を俱にせにやいかん。われ〳〵と一緒に行つてください。

西郷。どこへ行くのか。

森田。鹿兒島へ歸るんでごはす。鹿兒島へ……。

西郷。鹿兒島へ……

（西郷はしばらく無言。奥より石村賢次郎出で來りて窺ふ。）

西郷。（しづかに。）鹿兒島へどうして歸るか。

森田。晝間の會議で大方はきまつたやうに、圍みを衝いて出るんでごはす。

石村。（進み出て、注意するやうに聲をかける。）先生。

森田。えゝ、貴樣。また邪魔し居るか。（劍に手をかける。）

石村。いや、あなたこそ邪魔をするのです。

森田。　なに。

（森田は詰めよるを、西郷は遮る。）

西郷。　あゝ、この際に同士撃しちやいかん。

（表の方より兵士出づ。）

兵士。　桐野さんが見えられました。

西郷。　むゝ。

（桐野利秋が先に立ち、雨倉彌太郎、飯原勝彌、有馬銀之助、鮫島新七、ほかに兵士三十餘人つゞいて出づ。）

桐野。　西郷さん。いよ〳〵畫間の會議の通りに實行します。さつきから偵察戰を試みましたが、可愛嶽の方面は險阻をたのんで敵軍の配置も十分でないやうでごはす。この方面から突いて出れば、圍みを破る成算はあります。

（西郷は無言でかんがへてゐる。）

雨倉。　われ〳〵が不意に突出すれば、きつと圍みを破つて見せます。

一同。　（口々に。）先生。われ〳〵もお供します。

桐野。　（石村は不安らしく西郷の顏色をうかゞつてゐる。）今夜の十時を合圖に出發することに決めました。あんたの乘物は用意させてあります。そのつもりで支度してください。

西郷。　圍みを破つてどこへ出るのか。

桐野。　鹿兒島へ戻るんでごはす。森田、貴公はまだ西郷さんに云はんのか。

西郷。　いや、それは森田さんからも今聞いた。しかし鹿兒島も敵軍に占領されて居るぞ。

桐野。　それも突き破つて入込みます。

西郷。　入込んでどうするか。

桐野。　城山に籠ります。

西郷。　城山……。（考へる。）

桐野。　（すゝみ寄る。）西郷さん。どうで骨を埋むるなら故郷の山ぢや。なあ、さうぢやごはせんか。

西郷。　故郷の山……。

森田。　（迫るやうに。）西郷さん。もう斯うなつたら、みなの者にも世話を燒かせんで、兎もかくも城山まで戻つてください。故郷で立派に死んでください。そこで森田も一緒に死にます。

桐野。（しづかに。）桐野も死にます。

森田。あんたが何と云うたところで、こゝにをる人間が一人でも生きよう筈がごはせん。どうで死ぬなら若い者どもに既う一度、故郷を見せて遣つて下さらんか。

西郷。若い者どもに故郷を見せてやる。（決心して。）むゝ、歸らう。

一同。歸りますか。

西郷。秋風骨を埋む故郷の山、それもよからう。石村。

石村。はあ。

西郷。今聞く通りで、一先づこゝを立退くことになつた。おまへは駕籠の側について居つて、途中で敵に圍まれて、わしがあぶないと見たら、すぐにこの首を斬つてくれ。

石村。はあ。

西郷。西郷の首を敵に渡しちやならんぞ。

石村。かしこまりました。

（奥より虎吉出づ。）

虎吉。旦那様。すぐにお立ちでございますか。

西郷。おまへはお弓さんの死骸を取片附けて、あとから來い。しかし城山へたづねて來ちやいかんぞ。武村の屋敷へ戻つて、よいやうに跡始末をしてくれ。

虎吉。はい。（眼をふく。）

西郷。三匹の犬を宿無しにしてくれるなよ。

虎吉。はい。きつと可愛がつて育てゝやります。

西郷。桐野さん。一緒に行く者は何人ほどでごはすか。

桐野。各部隊とも思ひ〳〵に解散させまして、あとに殘つたのはおよそ五百人、いづれも決死の者ばかりで、門前に控へてをります。

西郷。（嘆息する。）それだけは何うしても殺さにやならんかなう。

森田。御一緒に死ぬのを喜んでをります。（一同に向ひて。）あらためて云うて聞かすが、可愛嶽はなか〳〵の險岨ぢや。足拵へをようせにやいかんぞ。一日分の兵粮を忘るゝな。

桐野。勿論松明など持つことは出來ん。谷底へ滑り落ちんやうに氣をつけて行け。

一同。はあ。

西郷。鹿兒島を出たのは二月の十七日、今夜は八月の十七日、丁度半年ぶりで故郷へ歸るんぢや。

いかに暗うても路に迷ふな。たがひに手をひいて失るゝな。たゞ眞直に鹿兒島へゆけ。

一同。鹿兒島へ行け。鹿兒島へゆけ。

（みな勇み立ちて口々に叫ぶ。山風の音。）

――幕――

お

七

明治四十四年八月作。
明治四十四年十月。本郷座初演。
初演當時の主なる役割――八百屋久兵衛（藤澤淺二郎）お七（河合武雄）湯島の傳吉（井上正夫）吉祥寺の僧（福島清）下男三太郎（藤井六輔）など。

登場人物――八百屋久兵衛。娘お七。下男三太郎、吉松。下女お杉。湯島の傳吉。番太郎源助。火の番の男。吉祥寺の僧。ほかに町人の男女大ぜい。

（一）

本郷二丁目の八百屋の店。二重屋體にて、下のかたの土間には青物類をならべたり。店の上のかたには火の見櫓ありて、太鼓をかけたり。櫓に隣りて町木戸あり。下の方は斜めに本郷の町家をみる。天和三年（元祿より六年前）正月下旬の陰りし日。

（下男三太郎は店さきの伏籠に飼ひたる鶏に青菜の葉をやつてゐる。番太郎のおやぢ源助は拍子木を頸にかけて立つ。）

源助。 どうだい、惡く寒いぢやないか。

三太郎。 お前なんぞは疝氣持だから、なほ〳〵堪へるだらうな。

源助。 お察しの通りだ。年をとつちやあ意氣地はない。この空模樣ぢやあ何うしても今夜は雪だ

らうよ。

三太郎。だが、空ッ風の吹くよりはましだらう。去年のやうな火事騒ぎは、もう懲々だ。

源　助。なるほど、去年の火事にはこゝら一面の燒原となつたが、それでもお江戸はありがたい、三月と經たぬうちに、もとの通り綺麗に家並も揃つたところを、こゝでまた紅い風が吹れてはたまらぬ。いくら寒くつても、雪の方がまあ無事だな。

三太郎。このあひだから催してゐたから、今度ふれば隨分積るだらう。

源　助。かういふ晩にかぎつて、番太さん木戸をたのみますと、うるさく來るもんだよ。大抵なが叩いても狸寐入りだ。はゝゝゝゝ。どれ、家へ歸つて安火にでも嚙り付かうか。

（源助は上のかたの木戸をあけて去る。風の音寒し。）

三太郎。これで今夜積つたら、あしたの朝、市へ買出しに行くのが難儀だらう。正月になつてもこんなに寒い年は珍らしいな。

（三太郎は呟きながら伏籠を片寄せなどする。奥よりこの家のむすめお七、十六歳、振袖に袴をはかせたる人形を抱きて出づ。）

お　七。三太郎。けふは大分冷えるではないか。

三太郎。今もその噂をしてゐましたが、どうしても一度は雪でござらうよ。

お　七。さうであらうなう。わたしも今日は朝から冷えてならぬ。（と人形にむかひ。）おゝ、お前もさぞ寒いことでござらう。さあ、さあ、わたしの肌であたゝめて上げませうぞ。（人形をふところに入れる。）

三太郎。お前もその人形には、きつい執心と見えますな。

お　七。女子が人形を可愛がるは、世間一統の習はしで、別に不思議もあるまいが……。

三太郎。でも、おまへの可愛がりやうは、また格別にみえますぞ。去年の暮こゝの普請が出來て、駒込から戻つて來ると、すぐにその人形を買つて來て、振袖を着せるやら袴をはかせるやら……。朝起きるから一日抱きしめて、よる寐るにも肌身を放さず、おゝ、さうだ。一昨日の晩、わしは奥に用があつて、おまへの部屋の前を通ると、何やらひそ〳〵と話聲がきこえる。はて、不思議なと、障子の隙から竊とのぞいて見ると、おまへはその人形と差向ひで、忍び男にでも逢うたやうに、左も嬉しさうに内證話。もしや氣でも狂つたのではあるまいかと、わしも一時は膽を潰しましたよ。

お　七。たましひのない人形ですら、人と思へばこれほどに可愛いものを……。若しこれがほんの

人であつたら……。

三太郎。　それこそ大事だ。このごろ流行る心中か駈落でもさつしやるだらう。はゝゝゝゝ。人形ならば遠慮はない。氣のすむほどに抱いてゞめて、たんと可愛がつて遣らつしやれ。

お七。　可愛がつてもよいかえ。

三太郎。　おゝ、ようござるよ。

お七。　このやうに可愛がつても……。（人形にわが頰をあてる。）

三太郎。　おゝ、よい、よい。

お七。　お前はなさけ知りの頼もしい人ぢやなう。妾はおまへが大好きぢや。憎らしいは下女のお杉め、人形いぢりもよい加減にして置けと、さつきも餘計な憎まれ口を利き居つた。ほんにほんに、腹の立つ奴、いま〳〵しい奴、憎い奴。父さんにさう云つて、この出代りには暇を遣らねばならぬ。三太郎、お前はいつまでも奉公しや。

三太郎。　ありがたうござります。

（雪すこしく降出づ。）

三太郎。　おゝ。たうとう白いものが降つて來ましたぞ。旦那樣の歸らぬうちに店をすこし片附けて置かねばなるまい。

（店さきに積みたる青物類を片寄せる。吉祥寺の僧、番傘を抱へてこの家のまへを通り過ぐれば、お七は眼ばやく見つける。）

お七。　あ、もし、お前は吉祥寺の……。

僧。　おゝ、お七どの……。久兵衛殿の店といふはこゝでござるか。

お七。　お前には色々聞きたいこともござります。まあ、まあ、こゝへお掛け下さりませ。これ、三太郎。お茶を早う汲んで來や。

三太郎。　あい、あい。

（三太郎は奥に入る。僧は店さきに腰をおろす。）

僧。　御普請は見事に出來しましたな。

お七。　いえ、ほんの假普請も同樣で、お恥かしうござります。

僧。　して、愚僧に何か御用かな。

お七。　はい、あの……。早速ながら……あの……吉三殿は……このごろ何うして居られますな。

僧。　どうと云ふこともござらぬ。先づは無事に暮して居りまするぢや。

お七。この頃の寒さに障りもなく……。

僧。おゝ。

お七。かぜも引かずに……。

僧。おゝ。

お七。お師匠様の御機嫌も損ねずに……。

僧。いや、師の坊の御機嫌はさん〳〵ぢや。實に困つたものでなう。

お七。え、困つたものとは……。

僧。あの吉三郎はこなたも知つて居らるゝ通り、容貌はよし、氣質もおとなしく、十三の年から寺入りして、去年まで足かけ四年の間、なに一つ仕損じたこともなく無事に勤め通してゐたところ、去年の暮、……おゝ、さうぢやや、丁度こなた衆が吉祥寺を引き拂つて、再びこゝへ戻られた頃からぢや。まるで魂のぬけた人のやうに、晝も夜も唯ぼんやりして何事も手につかず。用事を吩咐くれば間違ひばかり。經をよめば上の空。むかしとは打つて變つたありさまぢや。

お七。え。

僧。日頃から嚴しい師の坊、吉三めをあのまゝに捨て置いては、他の若僧共のみせしめにもならず、第一に本人の爲にもならぬと、きのふも強い御折檻、袴腰を把つて捻ぢ倒し、鐵如意をかう振りあげて……。

お七。あ、もし……。

（お七は思はずその手に縋り付く。）

僧。いや、打たれてはたまらぬ、骨は微塵ぢや。愚僧があわてゝ飛び込んで、法衣の袖にすがり付き、お慈悲をねがうて先づは無事に……。

お七。おゝ。（ほつと息をつく。）

僧。其場は兎もかくも濟んだれど、さて此後がどうあらうかと案じられ、わし等二三人が吉三を部屋へ連れて戻つて、此中からうか〳〵してゐるは何か仔細が無うてはかなはぬ、包まず云へと責め問うたが、俯向いたばかりで何にも云はず、果は涙をほろ〳〵と……。

お七。おゝ。（泣く。）

僧。前髪でこそあれ、あけて十七の男が涙をながすは一通りのことであるまい。と云つて、堅く口をつぐんで云はぬものを、無理に詮議する法も無し、つい其儘になつてしまうたが、

あれほど堅固な吉三郎に、どういふ魔が魅したものか、一圓合點がまゐらぬのぢや。

お七。 吉三どのには限らず、人には云ふに云はれぬ苦勞もあるもの、餘りきびしく根問ひしたら若いお人の突きつめて、どのやうな悲しいことにならうも知れませぬ。たゞそのまゝに捨てゝ置いたがようございます。此後もしお師匠樣の御機嫌を損じたときには、おまへ方も相弟子の好み、陰になり陽になり、庇つてあげてくださりませ。かへすゞ〳〵も賴みましたぞ。

僧。 さすがは優しい娘御ぢや。ひとの事にまで貰ひ泣きして、案じらるゝは道理ぢやが、わし等も傍に付いてゐる。吉三の身にあやまちの無いやうに、屹と氣をつけて遣りませうぞ。まあ、まあ、安心してゐさつしやれ。

お七。 どうぞお願ひ申しまする。

僧。 おゝ、ようござる。

（僧は起ちあがりて空を仰ぐ。雪烈しく降出づ。）

僧。 雪が大分烈しくなつて來たやうぢや。

（奥より三太郎は盆に茶碗をのせて出づ。）

三太郎。 お湯が冷めてゐたので遲くなりました。坊樣、お茶一つおあがりなされませ。

僧。 はゝ、これは御馳走ぢや。

お七。 生憎に雪が強くなつてまゐりました。こゝからお寺までは餘ほどの路程でございませうな。

僧。 さあ、駒込吉祥寺と一口に申せど、駒込も果の果、寺はこゝから小一里もござらうよ。

お七。 隨分遠方でございますなう。（ため息を吐く。）

僧。 では、もうお暇申しまする。久兵衞どのにも宜しく云うてくだされ。

お七。 父は湯島の天神さまへ參詣に出ましたれば、歸り次第に申し傳へまする。

僧。 なにさま今日は廿五日の御緣日でござつたなう。では、御免くだされ。

（僧は番傘に雪を凌ぎつゝ去る。三太郎はあとを見送る。）

三太郎。 や、降るわ。降るわ。あの坊樣もこの雪に、吉祥寺まで歸るのは辛からうよ。

（お七は答へず、立ちて僧の行方をぢつと見送る。この家の下男吉松は外より歸り來る。）

吉松。 どうもひどい雪になつたぞ。加賀樣のお屋敷からこゝへ來るまでに、この通り眞白だ。

三太郎。 して、なにか御用はあつたか。

吉　松。　御用はこの通り書付けにして下された。しかも今すぐに持つて來いとの御沙汰であつた。

（吉松は懷より書付けを出す。三太郎はひろげて見る。）

三太郎。　こりや色々の御註文だな。なにか急にお客來でもあるとみえる。早く持つて上らぬと、お臺所で叱られようぞ。おれも手傳つてやる、早く行け。

吉　松。　あい、あい。

（二人はあわたゞしく店さきに至りて、菜や芹などを入れたる青物の籠を擔ぎ、お七の方をみかへりて云ふ。）

三太郎。　では、一走り行つて來ますぞ。

（お七は答へず。ふたりは籠を擔ぎて雪のなかを走りゆく。お七は僧の行方をいつまでも見送りてひとり言。）

お　七。　あの横町の角を曲つて……坊樣のすがたも見えずなつた。この大雪に一里の路を、駒込の果まで歸るのは、さだめて難儀のことであらうが、吉祥寺へ歸ると聞けば羨ましい。わたしも一緒に行きたい……いつそあとを追うて行かうか。いや、いや、左らでもお師匠樣の御機嫌を損ねてゐるところへ、迂濶にわたしが尋ねて行つたら、吉三殿の難儀になるは知れたこと……。ほんにお師匠樣も恨めしい。なんぼお經を精出さぬと云うて、あの孱弱い吉三どのを酷たらしう折檻して……。それもみんな妾の罪ぢや。（人形にむかひて。）吉三どの、堪忍してくださりませ。これ、堪忍して下され。わかりましたか。悲しい涙はお前ばかりでない、わたしも毎日毎晩泣いてゐますぞ。（更に涙をぬぐひつゝ表を見る。）おゝ、雪が降る。去年の暮、吉祥寺を引き拂つて、こゝへ歸る前の日も丁度こんなに雪のふる寒い日であつた。あの晩泣いて別れたぎりで、足かけ二月もたよりは無し。今の話の樣子では、このごろは定めてお顏も窶れたであらう。わたしが毎朝搔いてあげた鬢の毛も、この頃は定めてそゝけて亂れて……。もし、吉三どの、かならず煩うてくださりますな。

（お七は向ふを視入りつゝ、おもはず土に降り立つ。雪烈しく降る。）

お　七。　逢ひたいは山々なれど……。こゝからは一里もある。あゝ、これが近所であつたら、たゞひお顏は見えずとも、せめて御門前まで……。なぜあのやうな遠い遠い邊鄙のところにお寺を建てたのであらうかなう。大きな高いお堂なれど、こゝからでは伸上つても見えはせぬ。駒込は……この方角に相違はないが……。

（伸び上りて見るうちに、ふと傍の火の見櫓に目をつけ、なにとは無しに一段のぼりて、向ふを眺

め、また一段昇りて向ふをながめ、我にもあらで二段三段とのぼり詰めて、櫓の上に至る。雪は風をまじへてどつと吹き下すに、お七は危く倒れんとして柱にすがる。）

お七。　折柄の雪に隔てられて、遠い果はよくも見えぬが、東の方に薄墨のやうにぼんやりと見えるのが駒込の觀音樣……。あの森を越えた向ふが確かに吉祥寺……。吉三どのは今頃どうしてござるか。わたしが斯うしてゐることを、よもや御存じはあるまいなう。あゝ、なんとかして妾の切ない胸を、あのお人に通じたいが、いくら呼んでも叫んでも、むかうまで屆くことはなし。これほどまでに思うてゐる妾の心が、むかうの胸にひゞくやうな……よい工夫はないものか。打てばひゞくと世の譬にも云ふものを……。（櫓の太鼓を見あげる。）お、打てばひゞく櫓の太鼓……。撥の音色にたましひ籠つて、吉三殿の胸にもひゞくであらうか。

（雪いよ〳〵烈し。お七は前後の分別なく、吹雪を袂にはらひつゝ、撥を把りて太鼓を打たんとす。この以前より湯島の傳吉、三十餘歳、破落戸漢のこしらへ、傘をかたげて出で、櫓を見あげて窺ひゐたりしが、このとき俄に聲をかける。）

傳吉。　あゝ、いけねえ。まあ、待つた。

お七。　え。

傳吉。　おい。お前もまあ飛んだことをするぜ。あらためて講釋をするまでもねえが、その太鼓は火事のしらせだ。うつかりどんと打つけた日にやあこの町内は云ふに及ばず、江戸中の騒ぎにならうも知れねえ。どういふ料簡で、そんな馬鹿な眞似をするのだ。

（お七は心付き、撥をおきて默つてゐる。）

傳吉。　第一この雪のふるのに、そんなところへ何しに登つたのだ。かぜでも引くと詰らねえ、早く降りて來ねえよ。

お七。　あい。

傳吉。　あいぢやあねえ。ほんたうに詰らねえことだ。さあ、早く降りた、降りた。

（お七は無言にて櫓を降りる。傳吉すゝみ寄る。）

傳吉。　それ見ねえ、頭もからだも眞白……まるで雪女郎だ。（わが手拭にてお七が着物の雪を拂ふ。）お前、よくまあ寒くねえな。女でも若いものは違つたもんだ。

（傳吉は傘をさしかけて立ちながら背後を見かへる。）

傳吉。　時に父さんは……。

お七。天神様へおまゐりに……。

傳吉。相變らず御信心だな。（うなづきながら、お七をつく〴〵視る。）お前もまあ、年のいかねえのに苦勞をするな。可哀さうに……。

お七。え。

傳吉。は、、隱すことはねえ。俺あ黑い眼でちやんと睨んでゐる。吉祥寺のお小姓は美い男だねえ。

（お七は默つて俯向く。）

傳吉。それほど男に逢ひてえか。

（お七答へず。）

傳吉。それも決して無理ぢやあねえ、おれもよく察してゐる。俺に都合の出來ることなら、どうにか首尾して逢はしても遣りてえが、相手はやかましいお寺樣、こつちの父さんは名代の堅人、この橋渡しは鳥渡むづかしいなう。だが、人の一念は岩をも透すで、どうしても繼しい男に逢ひてえと思へば、逢はれる時節がないでもあるめえ。つまりはお前の運次第だ。

お七。して、逢はれる時節といふのは……。

傳吉。そりやあ俺にも判らねえが、今お前が叩かうとした櫓の太鼓……。あれがほんたうに鳴る時こそ、お前が男に逢はれる時だ。

お七。あの太鼓がほんたうに鳴る時とは……。（思案して。）火事でござるかえ。

傳吉。まあ、さうだ。お前が吉祥寺へ立退いて、小姓と馴染の仲になつたも、あの太鼓が鳴つたお庇だ。もう一度あれがどんと鳴れば、お前ももう一度吉祥寺へ行かれるのだ。吉三とやらにも逢はれるのだ。

（お七は默してぢつと聽き入る。）

傳吉。いや、滅多なことは云はれねえ。お前はそれでよからうが、去年のやうな騷ぎが始まつちやあ諸人大勢の難儀になることだ。火事なんぞは眞平御免だ。はゝゝゝゝ。

（雪少しくやむ。お七は猶默して思案す。傳吉は向ふを見る。）

傳吉。おゝ、向ふから父さんが歸つて來た。雪のふるのに往來なんぞに立つてゐると叱られるぜ。早く内へ這入つて足でも拭きねえ。

（お七は無意識に店さきへ戻りて、腰をかける。）

傳吉。おい、どうした。なにをぼんやりしてゐるんだ。俺あこれから追分まで行かにやあならね

え。好鹽梅に小降りになつた。

（お七は矢はり無言。傳吉はお七をみかへり、心にうなづきながら去る。八百屋久兵衛、五十歳位、足駄をはき、傘をさして出づ。）

久兵衛。どうやら空模樣があぶないので、傘と足駄を用意して行つたら、どれもこれもお役に立つた。なんでも用心が肝心だ。（呟きながら店頭にあゆみ來る。）これ、お七。この寒いのに跣足で……何うしたのだ。大方また三太郎めと惡巫山戯でもして、むやみに表へ飛び出したのであらう。お前もあけて十六、なんぼ甘やかして育つたとて、もう子供ではない。ちと嗜んだがよいぞ。

（云ひつゝ内に入りて、店頭の火鉢のまへに坐る。伏籠のなかの鷄鳴く。久兵衛は眉をひそめる。）

久兵衛。鷄がまた鳴くわ。今頃鳴くのに不思議はないが、きのふも一昨日も二晩つゞいて宵鳴をするのが、どうも氣になつてならぬ。鷄が宵鳴をするは火事の前兆と、むかしから言ひ傳へてゐるが、火事は一度でもう懲々した。

（久兵衛は獨言のやうに云ふ。お七は俄に顔をあげる。）

お七。父さん。もう一度こゝの家が燒けたら、どこへ立退くのでござります。

久兵衛。どこと云つて仕樣もない。また吉祥寺の御厄介になるのだ。

（鷄の聲又きこゆ。）

久兵衛。えゝ、又鳴くわ。今夜もおほかた鳴くであらう。毎晩毎晩人に氣を揉まして、いまゝしい奴だ。

お七。お江戸は火事早い所、なんどきに火事が又起るまいとも限りませぬ。大事の物は一纏めにして、いつでもすぐに持ち出せるやうに、用心して置くがようござります。

久兵衛。大事の物は去年の火事にみんな燒いてしまつた。今度燒けたら父子が手をひいて、乞食になるよりほかはあるまい。

（三太郎と吉松は歸り來る。）

三太郎。おゝ、お歸りなされましたか。加賀樣のお屋敷から急の御用で……。

吉松。唯今納めてまゐりました。

久兵衛。それは御苦勞であつた。御用の品は何々だ。忘れぬうちに帳面につけて置かうか。

（久兵衛は壁にかけたる帳面を取りて硯箱より筆をとり出す。鷄の聲又きこゆ。）

久兵衛。えゝ、また鳴くか。不吉な奴だ。

三太郎。　此頃はなぜ宵鳴きをするか。まさかに火事のしらせでもあるまいが……。

吉　松。　不思議だなう。

久兵衛。　それだから氣になつてならぬのだ。昨夜はそいつのおかげで碌々に眠られなんだ。今夜も鳴いたら何うしてくれうぞ。

（鶏はまた鳴く。久兵衛は堪まらず、筆をすて、起ち上る。）

久兵衛。　そいつの鳴聲を聞くと、なんだか家中が一面の火焔に包まれたやうな氣がするわ。そいつに續けて鳴き立てられては、俺もしまひには氣狂ひにならうも知れぬ。えゝ、いつそのこと、裏口へ持つて行つて、絞殺してしまへ。

三太郎。　あい、あい。（籠より鶏をかゝへ出さんとす。）

お　七。　あれ、待ちや。（かけ寄つて籠を掩ひ。）可哀さうに……。殺しては……。

三太郎。　でも、宵鳴きは火事の前兆……。

お　七。　火事をおこすは人間の罪、鶏の知つたことではあるまい。

久兵衛。　お七、邪魔をするな。退いてゐろ。

（三太郎と吉松は寄らうとする。お七は振袖の袂にて籠を掩ひつゝ頭を掉る。鶏はまた鳴く。雪は再びふり出づ。）

（二）

八百屋の裏口。中央より上のかたへかけて、家の裏手をみせ、すべて板羽目なり。上のかたは水口のこゝろにて、雨戸を閉ぢたり。下のかたは一本の枯柳あり。雪は夜に入りて止みたれど、屋根も地も一面に白し。

（番太郎の源助は提灯をもち、火の番の男は拍子木と提灯を持ちて出づ。）

源　助。　やあ、御苦勞だね。それでも雪は止んだやうだ。

男。　夜通し降られちやあ火の番は大難儀だ。雪も先づこのくらゐにして置いて貰ひたいね。こんな晩にやあ大丈夫と思ふけれど、去年の火事以來、火の用心がやかましいので、斯う潜つて根よく廻つてゐるが、寒い、寒い、手足の指が切れさうだ。

源　助。　と云つて、横着を極めちやあならねえぜ。いくら火の元を嚴重にしても、火つけが流行る

から油斷はできねえ。今夜はなんだか胸騷ぎがする。おまけに八百屋の鷄は宵鳴きをする。どうも落ちついて寢てゐられないので、念のために町内を見廻りに來たのだ。

男。　去年の火事から怯氣が付いたね。

源助。　寒い間はまつたくこれが苦勞だよ。時にもう何時だらうね。

男。　かれこれ四つだらうよ。この雪でどこも早寢をしたから、世間は靜だ。どれ、もう一廻りして來ようか。

源助。　何分たのむぜ。

男。　火の用心……火の用心……。

（男は拍子木を打ちながら去る。源助は『おゝ、寒い、寒い』と呟きながら去る。八百屋の奥にて、鷄の聲きこゆ。湯島の傳吉は身輕にいでたち、頭巾をかぶりて出づ。）

傳吉。　吉祥寺の小姓に熱くなつて、眼が眩んでゐる彼のお七を、さつき好加減におだてゝ置いたが、あいつ思ひ切つて遣るだらうか。火つけは火あぶりの重いお仕置だ。なんぼ小娘でも其位のことは知つてゐるだらうから、迂濶にやあ遣るめえな。（少しく考へる。）

（やがて上のかたの水口の戸を内よりがたゝと搖る音するに、傳吉は心づきて四邊をうかゞひ、ぬき足して下のかたの物蔭にかくれ入る。時の鐘遠くきこゆ。水口の雨戸をあけて寢衣姿のお七うかゞひ出づ。時の鐘つゞいてきこゆ。お七は左右をみかへりてほつと息。むれの動悸の靜まらぬ體にて、再び内へ引返し、柄杓に水をくみ來りて一口のむ。その手は戰慄けり。時の鐘續いてきこゆ。四つの鐘を打ち切る間、お七は放心したるごとくに立つ。やがて心付きて、物に追はるゝ如くに下の方まで逃げゆきしが、また立止まりてあとを見る。されど内は舊のごとく蕭寂なるに、少しく疑ひあやぶむ如く、ぬき足して再び水口に來り、戸のあひだより内をうかゞひ視る。たちまち奥の方にて、下女下男の聲。）

皆々。　火事だ、火事だ。

（お七ははつとおどろき恐れて、轉ぶがごとくに走り退き、下の方の柳のかげに忍ぶ。下男吉松と下女お杉、いづれも寢衣すがたにて、水口より走り出づ。）

二人。　火事だ、火事だ。

（みな口々に叫ぶ。火の番の男出づ。）

男。　なに、火事だ……。火元はどこだ、どこだ。

吉松。　火元はそこだ。

お杉。　わたしの店ぢや。

男。　そりやあ大變……。火事だ、火事だ。

（傳吉忍び出で、水口より奥へうかゞひ入る。こなたの三人は心づかず、火事ぢや、火事だと頻りに叫ぶ。町内の男女大勢走り出づ。）

皆々。　火事か、火事か。

（口々に云ふ。水口より下男三太郎は銅盥をたゝきながら出づ。）

三太郎。　火事だ、火事だ。

男。　して、一體どこから出たのだ。

三太郎。　眼がさめたら家中が黑烟だ。どこから出たか判るものか。

（番太郎の源助出づ。）

源助。　これ、これ、なにを狼狽へてゐるのだ。唯わあ〳〵と騒ぐばかりが能ではない。ちつとも早く消す工夫をせねばならぬ。それ、水だ、水だ、水だ。（町人の半數は走り去る。）

皆々。　水だ、水だ。

源助。　さあ、早く消した、消した。

（町人のなかばは早く消せ、消せと叫びつゝ水口よりみだれ入る。源助は三太郎等をみかへる。）

源助。　お前達もぼんやりと見てゐることがあるものか。一緒に手傳つて消しなさい。時に久兵衛どのも……お七どのも……こゝには見えぬやうだな。

お杉。　もしやお二人とも逃げおくれて……。

男。　烟にでも卷かれては大變だ。

三太郎。　なるほど、こりやあ大變だ。

（三太郎と吉松はあわてゝ内へ走り入る。水口より黑煙ふき出づ。その煙をくゞりて傳吉出づ。小脇には大いなる風呂敷づつみを抱へたり。かれは走り去らんとして、心急くまゝに源助につき當る。）

源助。　えゝ、誰だ、誰だ。大風呂敷をかゝへて……。待て、待て。

（傳吉は突き倒して逃げ去らんとするを、火の番の男も駈寄つて取りおさへる。）

男。　こいつ胡散な奴……。火事場どろばうに相違あるまい。

（傳吉は突き退けてゆかんとすれば、源助は起きあがりて又組みつく。この爭ひのうちに、先刻の町人等は手桶その他に水を汲んで出づ。）

皆々。なに、火事場泥坊……。太え奴だ、逃がすな。

（傳吉は多勢を相手に爭ひしが、遂に力つきて捻ち伏せらる。ひとりは繩を持ち來りて傳吉を縛る。源助はその頭巾を取りて、透しみる。）

源助。おゝ、おまへは湯島の傳吉か。

男。ふだんから評判のよくない男だ。

お杉。今夜もおまへが火をつけたのではないか。

皆々。火つけだ、火つけだ。

（みな口々に罵る。傳吉は答へず、たゞ冷笑ふのみ。奥よりは黑煙いよ〳〵ふき出づ。水口より吉松は久兵衞を扶けて出づ。）

久兵衞。お七はどこに……。お七……。お七……。（呼びつゝ、物狂はしき體にて再び奥へ駈け入らんとす。）

吉松。まあ、お待ちなされませ。娘御は三太郎が探してをります。

久兵衞。お七……。お七……。

吉松。おまへに怪我があつてはならぬ。まあ、お待ちなされませ。

お杉。ほんに危ない。まあお待ちなされませ。

皆々。危い、あぶない。

（皆々制すれども、久兵衞は肯かず。お七……お七……と呼びつゝ又駈け入らんとするを、みなみな遮る。柳の木かげよりお七はふら〳〵と迷ひ出づ。）

源助。おゝ、お七どの……。こゝにゐたか。

久兵衞。なに、お七……。おゝ、こゝにゐたか。よくまあ無事でゐてくれたな。

（久兵衞はむすめの手をとりて喜ぶ。お七は醉へる人のごとし。さきに消防に駈け入りたる町人等は、煙に逐はれて水口より辟れ出づ。）

町人。駄目だ、駄目だ。もう一面に火がまはつた。

町人一。そりや大變……。ひとの家より我家が大事だ。

町人二。早く歸つて片附けねばなるまい。

皆々。さうだ、さうだ。

（町人等はみな慌てゝ走り去る。）

源助。もう斯うなつては小火では濟むまい。櫓の太鼓を打つとしようか。（行きかけて心付く。）なに

しろ、その放火者を自身番へ拘引いて行かうぜ。

男。　さあ、歩んだ。あゆんだ。

（火の番の男は縄をとりて、傳吉を引つ立つる。）

久兵衛。　なに、そいつが放火者……。うぬ、汝、憎い奴め……。

（拳をあげて撲たんとするを、吉松とお杉はさゝへる。傳吉はあざ笑ふ。）

傳吉。　なるほど俺あ火事場かせぎ、盗人のお仲間にやあ相違ねえが、まだ火焔りにされるほどの悪い事はしねえ。手前の家へ火をつけた奴はほかにある。（お七を見る。）おい、お七。砂利の上で逢はうぜ。

源助。　えゝ、早く行け、行け。

（源助は先に立ち、火の番の男は傳吉を引つ立てゝゆく。家の内よりは煙うづ巻き出で、軒を傳うて火焔の舌ひらめく。）

久兵衛。　あゝ、俺もいよ〳〵宿無しか。お七……何うしたらよからうなう。

（火の中にて鶏の聲きこゆ。）

久兵衛。　あの鶏めが……。火のなかでも鳴いてゐるわ。

（水口より三太郎走り出づ。）

三太郎。　旦那様。火は八方に擴がつて、とても手の附様はござりませぬぞ。おゝ、お七どの……。こゝにござつたか。私はさうとも知らずに、家中を探しました。（ふところより半は焦げたる彼の人形をとり出す。）これ、見さつしやい。おまへが可愛がつてゐた人形は、この通り……可哀さうに火あぶりぢや。

お七。　ほんに火焔りになつてしまうた。

（お七は焦げたる人形を打ちながめて茫然。火の見櫓の太鼓の音きこゆ。お七は夢より覺めたるごとくに叫ぶ。）

お七。　おゝ、太鼓……。父さん、早く吉祥寺へ……。

久兵衛。　おゝ。あすこへ立退くよりほかあるまい。

お七。　早く……。早く……。

（お七は片手に人形をいだき、片手に父の手を把りてあわたゞしく引つ立つる。奥には家のくづる音して、火焔と煙は熾にふき出づ。太鼓の音つゞいてきこゆ。）

——幕——

賴豪阿闍梨